三角形の片隅は

田宮ヨシノリ

登場人物

男1　タケルの友達（コウヘイ）
男2　タケルの友達（テツヤ）
女1　タケルの隣の部屋に住む人（ユキ）
男3　女1の彼氏らしき人（トシキ）
男4　カフェバーを営むために他所からきた男・女2のパートナー（タツキ）
女2　カフェバーを営むために地元に帰ってきた女・男4のパートナー（アキ）
女3　タケルの姉

オオサカはシンサイバシ、ニシシンサイバシにアメリカムラと呼ばれる場所がある。アメリカムラとは三角公園を中心に発展した、若者の中心地らしく、まあとにかく騒々しいがその空間には自身のファッションやカルチャーに対するこだわりが独特の熱気となって充満し、昼夜を問わず行き交う人々の胸を高鳴らせる。公園のすぐそばにあるそこそこでかいビジョンには今流行っているであろう音楽のMVが延々と流れている。三角公園の三角形には男女問わず、国籍問わず多くの若者が所狭しと座り、コンビニで買ったであろうチューハイを片手に夜通し騒いでいる。

その三角公園から南に2ブロック離れたところにビルとビルに挟まれたほっそい路地がある。この路地が舞台となる。三角公園からそこまで離れていないはずなのに、路地はシンと静かだ。

この細い路地、ビルに挟まれているといったものの、片方の側面にはフェンスが張られているため、この路地からアクセス可能なビルは一つだけである。そのビル、もといマンションに住んでいる住民、もしくはそのマンションの一階のテナントとなっている場所、そこの従業員のみが、この路地の利用者であるはずなのだ。

舞台の下手は路地の入り口となっており、反対側の舞台上手側には木製のベンチがある。雨風に晒され、ボロボロである。
舞台上手奥にマンションの上階に行くための螺旋階段、舞台下手奥にはテナントの裏口がある。その裏口にはすりガラスの小窓が付いており、中の灯りが漏れ出る仕様となっている。

第1場

ある夏の夜。
路地に小さな男がいる。まあ、実際に小さいわけではなく、なんとなく小柄な印象を持たせる。その男、男2は自転車に乗っている。乗っていると言っても、止まっている自転車に跨り、ぐるぐるぐるぐる車輪を回しているだけだ。たまにガチャガチャ自転車のギアを変えたりしている。

男2　暑い

と呟いたクセに男2はまだ自転車を漕ぐ。ぐるぐると車輪は回る。しばらくして、キュッとブレーキをして、

男2　暑いな

暑いのを認識する。暑さを振り切ろうとまたギアを軽いものから一番重いものへと変化させていく。カチ、カチ、カチ。

男2　ウオー！！

と叫んでみる。気持ち良さそうではあるが、気温は変わらない。
男1が路地の入り口から登場。叫んでいる男2を見つける。

男1　何してんの！？
男2　え？（と答えるが漕ぐのはやめず）
男1　え、何？
男2　暑いから
男1　え？
男2　暑いからさ
男1　暑いのはわかったけど
男2　うん、だからね
男1　じゃなくてさ
男2　うん？
男1　暑いなら漕ぐのやめなよ
男2　……。

漕ぎ続ける男2。

男1　暑いんだよね
男2　うん
男1　ならさ、降りてさ。ほらマクド買ってきたし
男2　いや、うん、いや、まあそうなんだけど
男1　何
男2　いや

男2、キュッと自転車のブレーキをかけて、

男1　何
男2　……汗でてきた
男1　は？
男2　止まったから、止まったから汗出てきた

男2、再び漕ぎ始める。

男1　……その自転車
男2　え
男1　そんな自転車だっけ？
男2　これ？
男1　そうそう、そんな自転車乗ってたっけ
男2　知らない
男1　え
男2　今日きたらさここにあって
男1　え、どういうこと？
男2　今日、きたら置いてあってさ
男1　え、盗んだの？

男2、キュッと自転車のブレーキをかけて、

男2　盗んでないよ！ここに置いてあったって
男1　うん。いや、それはわかったんだけどさ
男2　盗んでないよ
男1　盗んでないけどさ、乗ってんじゃん
男2　え？

男1　知らない自転車に乗ってんの？
男2　あ、うん。鍵かかってなかったから！
男1　あ、まあ、うん。わかったわかった

男2、また漕ぎ始める。
男1、螺旋階段の下の段に腰掛ける。手にはマクドナルドの包み紙。

男1　どっちがいい？ビッグマックかダブルチーズバーガー
男2　うー
男1　あと、レモンスカッシュかコーラ
男2　うー
男1　……俺は別にどっちでもいいよ
男2　あー、そうかい
男1　うん。まあ、でもあれだよ。強いていうなら、強いていうならダブルチーズバーガーかなっていう気持ちはあって
男2　あ、そうかい
男1　ほんとはさ、あの限定のやつと迷ってさ
男2　何？
男1　あの、ほら、サムライの、テリヤキのなんかさ、あるじゃん
男2　あるね
男1　でも、ほら、マクドってさこの、ここ（カウンター）、店員さんのここまでこないとさ、メニュー見れないじゃん。ディスプレイがあってもさ、なんかシュン、シュンって次いっちゃうし。もう正直店入る前にメニューなんか決まってんじゃん。まあ、とりあえずダブチで。それで、まあ、セットで、炭酸なら……みたいなさ。その、もうドリンクのこと考えてんのよ。甘い系か、意外とゼロカロリーってパターンもあるなみたいな。それで、並んでたらさ、限定のやつとかがシュンシュンってなって。あ、なんか美味しそうだなって思わせてくるのよ。思わせてくるんだけど、あ、美味しそうだなって思ったら、もう次のやつにいっちゃってるわけよ。だから、美味しそうだなって、なんだろう何が入ってんだろうとか気になってさ、次のターンを待ってさ、徐々に徐々に明らかになっていくわけ、そのバーガーの、限定バーガーの全貌が。でもさ、そうこうしてるうちに、もうメニューが見れる店員の目の前まで来ちゃってるのよ。後ろも並んでるしさ。で、結局「あ、え、あ、限定はでもな、結局よくわかんねえしな」みたいな。「あ、えーっとダブルチーズバーガーを」……みたいになっちゃうわけ。結局ダブチ。いいんだけどねうまいんだけどね。
男2　（自転車漕ぐのをやめて）俺さ、チーズの方がいいかも
男1　え

男2　ダブルチーズバーガー
男1　え、話聞いてた
男2　え、だからダブチはもう食べ飽きたから、違うの食べたいって話じゃないの
男1　ちげーよ、全然ちげーよ。限定バーガー食いたいのに結局ダブチにしちゃうって話
男2　一緒じゃん
男1　全然ちげーよ。ダブチはいいんだよ、ダブチに罪はないの。ダブチをそういう存在にしちゃう、食べ飽きちゃうくらい食べさせるその限定バーガーが、なんか、まあ悪いっていうか
男2　あ、そう
男1　そうじゃねえけど、もういいよそれで
男2　え、で、何、ダブチが食いたいの？
男1　は？え、まあ、どっちでもいいっつうか
男2　じゃあ俺ダブチで
男1　（舌打ち）

男1、ガサゴソガサゴソ手に持っている紙袋を探る。

男2　タケルの分は？
男1　あ？
男2　いや、タケルの分
男1　あ、そうか。そういえばそうか
男2　買ってきてねえの？
男1　っていうか、そうだ、タケルは？いねえの今日も
男2　うん、っぽいね
男1　あ、そう
男2　とりあえず、部屋にはいなさそうだったけど
男1　あ、そう
男2　うん
男1　っていうか、それを先に言えよな
男2　何
男1　タケル今日もいねえよって
男2　ああ、そうね
男1　（ため息）

男1が紙袋からダブチを取り出そうとしたところで、
女1が路地の入り口からやってくる。

女1　（二人を見つけて舌打ち）
男1　……何？

女1、無視して、二人の横を通り過ぎて螺旋階段の方に向かおうとする。

男1　え、何？
女1　……別に
男1　別にっていうか、何？
女1　（振り返って）ぜってえ食うなよハンバーガー！
男1　……え何？
女1　ぜってえ食うなよって言ってんの、その！手に、持ってるそのバーガーを
男1　え、なんで
女1　なんでじゃねえよ。普通に考えたらわかるでしょ
男1　え、なんで
女1　え、逆になんで？
男1　は？
女1　なんで、バーガー食べていいと思ってんの？
男1　いや、いいだろ
女1　だからなんで？
男1　なんで、って俺が買ったのこのバーガー！
女1　そりゃそうでしょ
男1　は？
女1　私が買ってあなたに渡したの？
男1　何言ってんの？
女1　（男2に）え、私が買ってこいつに渡したの？
男2　渡してないっす
男1　な
女1　だよね
男1　じゃあいいじゃん、俺が買って俺が食うんだから。（男2に）な
男2　俺も食う
男1　何？
男2　お前が買ったけど俺も食っていい？
男1　うん、いや、いいんだけど、そうじゃなくて
男2　おごり？
男1　おごり？何、金ないの
男2　うん

男1　じゃあいいよ、奢りで
男2　あざっす
男1　うん、（女1に）だから、こいつの分も俺買ってきた、俺の、俺たちのバーガーだから、別にさ食ってもいいじゃん。わかる？
女1　ここ、どこ？
男1　は？
女1　ここ
男1　え、どこって何？路地？
女1　私の家、あそこ（と言いながら、階段の上を指す）。ここは？
男1　は？
男2　……家の前
男1　え
女1　そう！ここは、他人（ひと）ん家の前。わかる？
男1　わかるって
女1　あんたさ、自分の家の前で毎日毎日マクド食われる人間の気持ちわかる？
男1　わかるって
女1　あのね！私、割と真面目に、真面目に働いているわけ。真面目に働いてるけど、そんな大してお金もないし、外食したらすぐ太るし、呑みすぎちゃうし。だから作り置きしてるわけよ、日曜に、他にやりたいこともあるけど！平日はやっぱり時間もないし気力もないし。作り置きして、作り置いたものを、食べにさ、帰ってきてるの。お腹空いてるけど！それをさ、毎日毎日、こんなところでファーストフードの匂い、撒き散らかされたら……
男1　毎日いるわけじゃ
女1　毎日いるじゃん、毎日毎日
男1　毎日ってここ数日でしょ
女1　四日
男1　四日？
女1　四日は毎日だから。一日、二日はまだいいよ、いや、よくないよ、でもいいよ。でも限界、三日目で限界。三日間連続で何かが行われたらそれはもう毎日だから
男1　いや、
女1　なに！
男1　たしかに四日間くらいいますけど
女1　でしょ？
男1　でもさ、ここはまあ公共の道っていうか
女1　公共？
男1　いやね、（周りを見て）確かに、公共じゃないかも。家の前でマクド食われ

るの嫌だね。たしかに、俺も嫌だ。でも、それは、なんだろう玄関出たところで食べられてたらさ、扉の前でめちゃくちゃ食われてたらさ、嫌だけど、ここはあなたの部屋の扉の前ってわけじゃないし、どっちかっていうと公共性がある方の、道の端っていうか、

女1　だけじゃないから

男1　え

女1　それだけじゃないから

男1　なんですか、もう

女1　あんたたちでしょ、ピンポンピンポン

男1　は？

女1　ピンポンピンポン、隣の部屋で

男1　……。

女1　タケルって言ってみなよ

男1　……。

女1　タケルって

男1　……。

男2　……タケル

男1　おま

女1　ほら、すごい聞いたことある、すっごい聞いたここ二、三日

男1　いや、まあ

女1　うるさいんだよ！休みの日なのにピンポンピンポンピンポンピンポン！私はね宅配の荷物だってわざわざ、わざわざ先回りして、休みの日には届かないようにしてるの、休みの日には！なのに、あんたたちが、ピンポンピンポンピンポンピンポン鳴らすから

男1　それは、まあ、でも、俺らも

女1　俺らも何？

男1　俺らも、タケルがいなくなって、どうしたらいいかわかんねえし

女1　知らねえよ

男1　知らねえよってなんだよ

女1　知らねえもん

男1　あ？

女1　知らねえタケルより休日の睡眠の方が大事なの！

男2　すみませんでした！

男1　え

女1　え

男2　……ごめんなさい、すみませんでした

女1　（キッと男1を睨む）

男1　……すんません
女1　食べないでね、ハンバーガー
男2　はい

男1、なぜか即答で返事をする男2を訝しむ。
女1もそれは同様に。
だが、何事もなくケロッとしている男2。

女1　……だいたいさ

と女1が喋り始めたところで、
男3が路地の入り口からやってくる。大柄なちょっとガラが悪そう。

女1　あ
男3　なあ、

と、次の瞬間女1が螺旋階段を登り、消えていく。
カンカンカンカンと、鉄製の階段が鳴る。塗装は多分、ハゲハゲ。

男3　なあ、ちょっと待てって

と、男3も女1を追って、階段を登っていこうとする、
と男2がその前に立ちはだかる。

男1　え
男3　え、何
男2　……。
男3　え、何、君誰？
男2　……。
男1　（男2に）おい

男2どく。
男3、不審がりながらも女1を追って、階段を登っていく。ゴンゴンゴンゴン、体重が重いからか、履いている靴の底の材質が違うからか、階段の鳴る音が違う。
残される男1、男2。

男1　え、何、誰
男2　（マクドナルドの紙袋を男1から取る）。
男1　知ってる人？
男2　うん、見たことある
男1　え、そうなの？
男2　タケルの隣の部屋の人
男1　隣？４０……
男2　４０２。タケルが４０１だからその隣
男1　え、見たことあるんだ
男2　なんか、ゴミかなんか出しに行くのをさ、ピンポンしながら見てた
男1　あ、そう
男2　でも、なんか雰囲気違ったな。その時は、こうメガネでダル着って感じだったから
男1　へー
男2　綺麗な人だよね
男1　え？
男2　え、そんなことない？
男1　いや、じゃなくて
男2　え？
男1　女の方じゃなくて、
男2　ああ、男の
男1　そう、男のいかつい
男2　知らない
男1　え？
男2　うん
男1　え、知らないの？
男2　うん
男1　……お前、やるな
男2　まあね

男2、自転車に座って紙袋からポテトを取り出し、食べる。

男1　え、食ってんじゃん
男2　え
男1　え、謝ってなかった？
男2　（口もごもごさせながら）ハンバーガーわね
男1　え？

男2　ハンバーガーはね。ポテトはいいでしょ、ポテトだし。お腹減ってるし
男1　……まあ、そうか。（大人しくいうこと聞くのは）癪だしね
男2　ん？

男1も男2の袋からポテトをもらいながら食べる。

男1　もう四日か
男2　うん
男1　どこ行ったんだろうね
男2　どこだろう。どっか
男1　テツは心配じゃないわけ？
男2　別に
男1　なんかドライ
男2　ドライっていうか、どこ行くのもタケルの自由っていうか
男1　まあ、そうだけど、何かに巻き込まれたとかさ
男2　何に？
男1　わかんないけど、違法で、違法な、なんか
男2　違法ね
男1　わかんないけどね、知らないし
男2　知らないよね
男1　何を？
男2　タケルのこと
男1　え、知らないか？
男2　知ってるか
男1　知ってるだろ、結構長いこと一緒にいるぜ、俺たち
男2　そうかい？
男1　そうだろ……多分

男2ポテトを食いながら、自転車を漕ぐ。

男1　自転車誰のかな
男2　さあ
男1　なかったよね昨日まで
男2　うん。でも多分おしゃれなお金持ちだよ
男1　え、なんで？
男2　乗り心地すごいいいもん
男1　乗り心地関係ないだろ

男2　お尻のところが
男1　サドル？
男2　そう、サドルのところがふかふかでさ
男1　ふかふか？
男2　自転車に乗り心地求めるようなやつはさ。おしゃれか金持ちか、おしゃれな金持ちだよ
男1　金持ちはともかく、乗り心地とおしゃれは関係ないだろ
男2　え、そう？
男1　乗り心地良くしたって見た目は変わらないだろ
男2　違うよ、気持ちだよ
男1　気持ち？
男2　気持ちおしゃれってこと
男1　気持ちおしゃれね
男2　気持ちおしゃれで、気持ち金持ち
男1　何それ
男2　金はないけど金をもってる気持ちで暮らそうとする卑しい連中だよ
男1　そんなやついるか？
男2　いるの。金のないやつに限って気持ち金持ち。金持ちの気持ちで暮らしてたら金持ちになるっていうさ、思想
男1　そんなんで金持ちになったら苦労しないよ
男2　あったりめえよ

男2、自転車の漕ぐ速度を早める。

男2　あったりめえよ！

と、マンションの裏口の扉についているすりガラスが明るくなる。誰かがスイッチを入れたみたい。

男1　あ
男2　え？

男2、漕ぐのをやめる。カラカラ空回りする車輪。
すぐに電気が消える。

男1　ここってなんだっけ？
男2　うーん、なんだっけ

男1　店とか？でもこの前潰れたはずだけどな
男2　そうだっけ？
男1　覚えてないカンコク料理の店
男2　全然
男1　なんかネオンがすごくてさ、緑だかピンクだかの
男2　ネオンなんて、珍しくないでしょ、最近は
男1　そうか
男2　特にこの街は
男1　いやでも、ピンクだか緑だかがビカビカの店で焼肉食いたいか？
男2　サムギョプサル
男1　え
男2　焼肉じゃなくて、サムギョプサル
男1　焼肉だろ
男2　焼肉だけど、サムギョプサルでしょ
男1　一緒だろ
男2　全然違うよ、焼飯とチャーハンくらい違う
男1　一緒じゃん
男2　だめだよ一緒にしたら、焼飯は焼飯。チャーハンはチャーハン。焼肉は焼肉。サムギョプサルはサムギョプサル
男1　意味わかんね
男2　その前がラーメン屋だっけ？
男1　ラーメン屋……あ、そうラーメン屋あったな、あったよラーメン屋
男2　だよね
男1　でも、そんなのずいぶん昔の話だよ
男2　そう？
男1　俺が高校生の時だよラーメン屋だったのは
男2　美味しかったよね
男1　うまかった、ラーメンもうまかったけど、チャーハンもうまかった
男2　焼飯だって
男1　え
男2　焼飯セットだって
男1　だから一緒だろ
男2　全然違うって
男1　何がだよ
男2　グリーンピース入ってるか入ってないか
男1　それは、店によるだろ。好みだろ
男2　え？

男1　まあ、でもたしかに、入ってたような
男2　名前なんだっけ？
男1　ラーメン屋？……名前、覚えてないな
男2　なんだっけな
男1　結構、来てたんだけどな……
男2　ラーメン食う時、名前のこと考えないもんね
男1　ラーメン屋……潰れちゃって悲しかったんだよな……でもその頃にはもうあんまり行ってなくて……そのあと、なんかの飲食店になったんだけどすぐなくなって……居酒屋になって、それも潰れて……それでそう、インドカレー？になって、しばらくやってるなあとか思ってたら、気づいたらカンコク料理屋になってて、今時だなーとか思ってたら潰れて、今は……なんだっけな、何にもなかったんじゃないか？
男2　え、でも誰か居たよ
男1　新しい店かな……可哀想
男2　何が？
男1　ここ、店できても気づいたら潰れてるからね
男2　それは……可哀想

もう一度電気がつく。

男1　あ

すりガラスに人影が映る。

男1　ちょっと、降りろ降りろ
男2　え、なんで
男1　隠れろ隠れろ
男2　え、なんでよ

男2、半ば強引に自転車から降ろされて、物陰に隠れる。

男2　え、何
男1　いや、わかんないけど
男2　なんか悪いことした？
男1　他人（ひと）の自転車乗ってんの結構ギリギリアウトだと思う
男2　あ、そうね
男1　うん

扉が開いて、大きなゴミ袋を持った男４が出てくる。
扉の下手側にはよく町の路地にありそうな、ゴミ収集用の箱がおいてあって、そこにゴミを入れる。入れ終わりほっと一息。
一息つくと、なんか気になる。なんだろう。スンスン嗅いでみる。

男４　うん？

スンスン嗅ぐ。

男４　マック？

スンスン嗅ぐ。まあ、そんな匂いもするか路地裏だし。近くの壁にもたれかかって、ポケットから煙草を取り出す。
ふと、上を見る。ビルの上には謎のオブジェがあってネオンの明かりで光っている。
そのまま、煙草を口に咥えて火をつけようとする。
と、男３が階段から降りてくる。下まで降りてきて、階段を蹴飛ばす。
ガン。と音を立てる階段。そのまま路地から立ち去ろうと振り返ると、

男３　（男４を見て）あ
男４　あ（と、煙草を口から外す）、すいません
男３　（なんのことだかわからず）ああ？まあ
男４　なんか、あれですよね、全面ダメだって
男３　ゼンメン？
男４　え、あれ、違いましたっけ？最近そうなったみたいな
男３　ゼンメン？が何？
男４　あ、いや、なんでも
男３　君
男４　はい
男３　君？
男４　はい？
男３　マクド食べたの
男４　え、マクド？
男３　違うか、さっきの（奴ら）か
男４　はあ

男3　匂うよね、ポテト
男4　ポテト？
男3　匂わない？（と、鼻をスンスンする）
男4　ああ、ポテトポテト！マックマック！
男3　匂うよね
男4　匂います匂います
男3　だよね
男4　近くにあるんですか？
男3　まあ、あるっちゃあるんだけど、こんなには匂わないと思う
男4　へー近くに
男3　あれ？知らないの？
男4　そうなんです、最近引っ越してきて
男3　へー（と、鼻をスンスンする）
男4　気になりますか？
男3　いや、僕は別にいいんだけどね

スンスンしながら歩く男3。

男3　機嫌悪いんだよ
男4　はい？
男3　彼女
男4　……。
男3　すごい怒っているんだ。要領得ないっていうか話が通じないっていうか……そういうことってないかい？すごい怒っている時
男4　すごい怒っている時？
男3　うん
男4　まあ、ありますね
男3　だよね
男4　あんまり、何言っても通用しない感じというか
男3　そうなんだよ！まさに、そうで。たしかに、初めの原因は僕にあったのかもしれない。少しだけ強く言ってしまったというか、なんかそういう時ってあるじゃない。はずみでっていうか勢いで言ってしまう時が。こちらもね、別にそんなことを言いたいとか言えるとか思ってないというか……ただとりあえず、わーっと口から出てしまう時。ちょっと気が散ってて、階段の一番下の段踏み外してさ、うわっ！と口から飛び出ちゃう時。その何かよくわからない、「わー」が
男4　ついうっかり

男3　ついうっかり。たしかにね、僕はそういう時ある。どちらかというと多いかもしれない。でもね、これまでは全然機嫌直してたんだよ……なのにさ
男4　はい
男3　さっき、部屋で話していたら、すごい怒ってらっしゃって。「わー」って言っちゃった時より、全然すごい怒ってらっしゃって。
男4　え、なんでですか？
男3　そう！そうでしょ！なんでですかってなるじゃない。だって「わー」って言ってからここに来るまで、僕は彼女と話したりしていないわけだから。怒りのゲージがあるとすれば、「僕のわー」、ここがピークだよね、普通に考えたら。そして、ここのピークに関しては僕が悪い。それは認めるよ。申し訳ないと。でも、このピークから時間が経ったさっき、そのピークより怒ってたその怒りの分は、僕は関係ないわけじゃない。だから聞いたの、どうしてさっきよりも怒っているんだい？ってそうしたら、マクドがなんか臭いし、お腹減ってるしみたいな話をされて
男4　マック
男3　そうそう。そんなのこちらは知らないわけじゃない。ほんと、要領得ないっていうか、わけわからないというか

男2がなんか突然でてくる。

男4　あ
男3　うわ、お前じゃん

無言で男3を睨む男2。

男3　え、何
男2　……。
男3　え？何？

男2、何も答えない。
見かねて男1出ていく。

男4　あ
男1　すいませんね、なんか。（男2に）おい
男2　……。
男1　おい。
男2　……。
男3　（男1に）何、こいつ。

男1　いや、ちょっと、俺もよくわかんなくて、すいません
男3　さすがにちょっと気味悪いんですけど
男1　そうっすよね、すいません、ほんと
男2　謝るなよ！
男1　え
男2　すぐ謝るなよ！
男1　え、なんだよ
男2　さっきは全然謝らなかったじゃないか！それを今は
男1　さっき？
男2　さっきはさっきだろ！彼女にハンバーガー食うなよって、うるさくすんなよって言われた時、謝らなかったじゃないか！
男1　あー
男2　そうだろ！謝らなかったのに、今はすいませんすいませんって3回も謝って。コウヘイは何？そんなに悪いことをしたの？
男1　何言ってんの？
男2　こいつ（男3）に対して、そんな悪いことをしたのかって
男3　僕かい？
男2　お前だよ
男3　僕？
男1　違うよ、違うって。今のはお前がこの人に対して、意味わかんないしなんにも言わないから、とりあえず、場繋ぎ的に謝ったっていうか
男3　とりあえず？
男1　あ、違います。謝罪です。謝罪なんですけど、そこまでじゃないっていうか、なんだろう、当人じゃない謝罪っていうか。それはだって当人じゃないし
男2　なにもしていないだろ
男1　お前がなんか睨んでんだろ
男2　それは、俺たちのせいにされたからだろ
男1　何を
男2　彼女が怒ってることがだよ！まるで、俺たちのせいみたいじゃないか、この人の言い草だと
男1　それは、現に俺たちのせいだろ
男2　なんで
男1　なんでってさっきこの人が言ってただろ、あの女の人が俺たちのせいで怒ってるって。実際に怒ってたじゃないか
男2　怒ってたけど、それはこの人が怒らせたからでしょ、（男4に）ねえ
男4　え？

男2　（すぐ男1に）この人、さっきすごい説明してたけど、何にも言ってなかったよ。「わー」ってただ「わー」って言っちゃっただけだとかなんとか言って、その「わー」で怒ったのが最終的には俺らのマクドのせいになってたよ。（男4に）ねえ

男4　え、僕ですか？

男2　君も君だよ。気づかなかったの？

男4　何がですか？

男2　話がすり替わってたことにだよ。「わー」って話から、マクドの話にすり替わってたことに

男4　あ、いや、気づかなかったっていうか

男3　ちょっといいかい？

男2　なに

男3　あ？

男2　なんだよ

男1　まあまあ、ちょっと、ちょっとすいませんね（と言いながら男2を端まで追いやる。）

鼻息の荒い男2、男3から目線を逸らさない。

男3　（男4に）すみませんね

男4　あ、いや、全然

男3　また、今度

男4　あ、は（い）

男3　（男2に）頭おかしいんじゃねえの！！イカれ野郎！！

と突然の大声、そして去る。

去り際に、近くにあった自転車を蹴飛ばし、去る。

残される三人。

男1　正論。まさに正論。

男2　……。

男1　え、お前さ、なんなの

男2　……。

答えない男2。

しかたがないので、男1が自転車を直そうとすると、

男2　あいつ知ってる
男1　え
男2　あいつ、タケルの部屋の前で見た
男1　え、お前知らないって
男2　近くで見たら思い出した。ここにホクロあったやつ
男1　え、タケル？
男2　（男3の行った先を見つめ）他人（ひと）の自転車蹴ってんじゃねえよ！
男1　正論、それも正論（といいながら自転車を元に戻そうとして）
男4　あ、すいません
男1　え
男4　え、あ、これ僕の自転車で
男1　あ……あー、そうですか
男2　……あれ？君、誰
男4　え
男2　あれ？君。見たことない
男4　あ、そうですね、多分
男2　初めまして？
男4　初めましてですね、ええ
男2　あー
男4　最近、こっちに来まして……

なんだか気まずい。
男1は自転車を持ち上げようとして、横たわっている自転車に触れてはいるものの、所有者を前にへんてこな感じになっていることを感じて動けない。

男4　（気づいて）あ、
男1　あ、いや
男4　いただきましょうか？
男1　あ、はあ
男4　すいませんね

男4、男1から自転車を受け取り、元に戻す。

男1　……いい自転車ですね
男4　え。そうですか？
男1　あ、はい。なんか乗り心地が良さそうな

男2　おしゃれだし
男4　そう言っていただけると(嬉しいです)……

男1のナイスパスが出たかと思いきや、会話が続かない。

男1　あー、引っ越して来たとか
男4　あー、そう。そうなんです。お店をね、始めまして
男1　へー
男4　(扉を指して)ここです
男1　あ、ここで
男4　そうなんです
男1　へー
男2　可哀想
男4　え?
男1　おい、バカ
男4　かわいそう?
男1　あ、いや、初日から絡まれてっていう、俺らみたいなやつらに
男2　あんな奴に絡まれて
男1　なあ
男4　ああ、さっきの。たしかにちょっと怖かったですけど
男1　大柄でね
男2　でかいだけだよ、あんなの
男4　お知り合い、なんですか?
男1　あ、いや、
男2　友達の知り合いかもしれない人
男4　……へー
男1　なんのお店なんですか?
男4　うちはカフェバーですね
男1　カフェバー?
男4　カフェバーです。カフェとバーっていう
男1　ああ、カフェとバー
男4　あんまり聞かないですかね?カフェバー。カフェアンドバー
男1　ああ、いや
男4　昼間は普通のカフェで夜はバーで。あ、でもお昼もアルコール出したりするんで、厳密には時間で分けたりしているわけではないんですけど
男1　へー
男2　おしゃれだ

男4　おしゃれっていうか、まあ
男2　マック
男4　はい？
男2　さっき、マックって言ってましたね
男4　ああ、ええ
男1　あ、カントーの人ですか？
男4　ああ、まあ
男1　へー、わざわざ遠くから
男4　……パートナーがこっちの出身で
男1　ああ、奥さん
男4　あ……まあ
男1　それでこっちに
男4　ええ、まあ、そうですね
男2　いい時計ですね
男4　はい？

男4、左手首をよく見るとなにやらごつい時計をつけている。

男4　ああ、いや、そんなにいいっていうわけでも
男2　いい自転車だし、店はおしゃれだし
男4　え？
男1　（男2に）おい、お前さ
男2　おしゃれ金持ち？
男4　……。
男2　やっぱり？
男4　……。
男1　お前、何言ってんの
女2　（声）　ねえ、ゴミ出しに行くのに時間かかりすぎだって

扉に人影が映り、扉が開く。女2出てくる。

女2　ねえ……（男1を見て）あれ？
男1　……アキ？
男4　……。

暗転。

第2場

少し時間が経った夜。
場所変わらず、路地。
自転車のカゴには、先ほどのマクドナルドの紙袋が入っている。
男1と女2がいる。

男1　ほら、階段をおりて左手に曲がるとさ、職員室があって。その前に部活で優勝した時の表彰状とかがさ、飾ってあって
女2　お皿とかね
男1　お皿？そう！お皿。あれなんだったんだろうね
女2　ね
男1　優勝して、トロフィーはいいけどお皿なんかもらってきてさ。使わないしね、お皿は。飾るだけ
女2　ね
男1　困るだろうな、みんな困ってるだろうな
女2　みんな？
男1　わかんないけどさ、まず選手でしょ。甲子園かなんかで優勝して、クタクタだよ。朝からボールを打っては投げてはしていたわけだから。炎天下の中必死こいて投げてさ、やった！優勝だ！って思ったら息つく間もなく閉会式とか？まあ、多少休憩する時間あったとしても、多少だからね。一回座っちゃったら逆に疲れちゃうというか、足に乳酸溜まって、アドレナリンも切れて、「疲れたわ、だりー」みたいな。そのちょっと気の抜けた状態で閉会式始まって、「なんだよ、俺たち立ってんのに、知らねえおっさん座りっぱなしかよ」みたいなこと思うわけ。で、優勝校の代表選手が呼ばれて前でて、まず表彰状でしょ。部長がさ、「ありがとうございます。」みたいな。それで、次がトロフィー、多分ピッチャー？エースかな？が「おおでかい」みたいな。表彰状もらった部長も「おお、いいな」とか思うわけ。でさ、三人目。まあ、副部長かな、俺呼ばれたけど何もらうんだろうみたいな、で、デカいお皿渡されんの。「え、皿っすか？」みたいな。隣の二人も「え？皿かよ」って。受け取った途端にことの重大性に気づくわけ。「意外にっていうか普通に重いっす。僕もう腕とか乳酸でパンパンなんす。これ、落としたら割れるっすよね、だって陶器の重さだもん」みたいな。プルプルしながら受け取ってさ。渡すおっさんもおっさんで、「はい、表彰状。はい、トロフィー。あれ、三人いるの？あと、何？あ、皿？ちょっとデカくない？重くない？早く受け取れ！」みたいな。みんな困ってるのよ
女2　もらったことあるの？
男1　え？

女2　お皿
男1　いや、俺はないけどね
女2　やっぱり
男1　やっぱりって
女2　思わないもん、「うわ、おっさん座りっぱなしかよ」とか「え、皿重いっすよ」とか
男1　わかんないよ、思ってるかもよ
女2　コウヘイ君は思うかもしれないけど、甲子園で優勝するような人たちはそんなこと思わないよ
男1　そうかな？
女2　うん
男1　……いや、まあ、別にどっちでもいいんだけど
女2　なんの話だっけ？
男1　え？
女2　お皿の話？
男1　あ、いや、違うよ。その皿の前の、職員室の前を通って、右手に家庭科室があったでしょ
女2　そうだっけ
男1　え、覚えてないの？
女2　うーん
男1　よくさ、俺が部活の時に、アキが家庭科室で、なんか色々作ってたじゃん、お菓子とか
女2　あー
男1　家庭科室の窓の外に、花壇があって
女2　花壇ね……
男1　え、覚えてないの？
女2　ごめんね、卒業してから学校行けてないし
男1　いや、俺も成人式だけだけど
女2　成人式！どうだった？みんな来てた
男1　ああ、まあ、結構来てたと思うよ
女2　やっぱり
男1　ほら、みんな割と実家というか、こっちに残ってる人多いしさ
女2　わたしも帰ってきたらよかったな、意地張らずに
男1　意地？
女2　なんか、こっちに帰ってきてみんなの顔を見たらさ、やっぱり帰りたくなっちゃうというか
男1　そういうもん？

女2　そうだよ、やっぱり寂しいよ、一人で遠く離れた、言葉も違う場所で、
男1　違うか？
女2　違うよ、やっぱり。いや、話してることはわかるよやっぱり、同じニホンだし。友達も、私は友達って思ってる人はいるし。でも、なんかふとした時に、この人と私は、違う場所で生きてきたんだなって思うの。彼女と私は今一緒に喫茶店でパンケーキを、あ、普通のパンケーキだよ、普通の、普通サイズのパンケーキを食べてるけど。私は、このパンケーキを普通のサイズって思ってるけど、彼女にとっては小さいサイズなのかもしれない。私は、小さい大きいって思うけど、この人はSサイズ、Lサイズって思ってるかもしれないって
男1　それは、普段二郎系ラーメン食べてるやつの普通サイズと一般的なラーメン屋でしか食べたことのないやつの普通サイズは違うって話？
女2　わからない。食べたことないから
男1　あ、そうか
女2　あと、私ラーメンに例えられるのすごい嫌かも
男1　あ、ごめん
女2　食べないし、普段ラーメン
男1　いや、俺が言いたいのは、別にそれは場所の違いって関係ないっていうか、ようはその人が普段どういうものに触れてるかっていう話でさ、
女2　でも、それって場所が大事でしょ
男1　まあ、そうなんだけど
女2　だって安心するよ、わたし
男1　え
女2　コウヘイくんと喋ってると
男1　え？
女2　こっち帰ってきてから、あんまり誰にも会えてなかったし
男1　あ、そうなの？
女2　うん。ほんとびっくりしたよ、タツキくん呼びにきたらまさかコウヘイくんがいるなんて
男1　タツキくん？
女2　タツキくん
男1　ああ、タツキくんね
女2　うん、タツキくん
男1　その、タツキくんは……
女2　うん？

男1「そのタツキくんとはさ、その、やっぱり、結婚してらっしゃるのでしょうかねえ？」という言葉が、喉仏まできているけど出せない。

男1　……気づかなかったな
女2　何が？
男1　いや、ここに新しいお店ができてたなんて
女2　ああ、まあ、内装の工事なんかはだいぶ前に終わらせてたし。お昼間は私たち準備してたけど
男1　俺ら、夜しか来なかったからさ
女2　そっかー。誰か待ってるんだっけ？
男1　そうそう、タケルっていう
女2　知らないや
男1　高校出てからの友達だしね、なんか、急にどっか行っちゃって
女2　連絡取れないの？
男1　そう
女2　ふーん
男1　だから、あいつと、テツと待ってるのよ夜な夜な。やることもないし
女2　公園の方は？
男1　え？
女2　三角公園
男1　ああ
女2　そっちで待てばいいのに
男1　いや、なんかね、新しい……
女2　え
男1　新しいやつがいるから
女2　新しいやつ？
男1　……今日は？
女2　なに？
男1　どうして夜に？
女2　ああ。オープン近づいてきて、ちょっと流石にやらないとっていう（と立ち上がり、お店を気にする）
男1　オープンいつなの？
女2　来週
男1　来週って、あと3日？
女2　だいたい？
男1　え、間に合うの？
女2　大丈夫だよ、きっと
男1　あ、そう
女2　多分ね

と、いいながら扉の方へ向かう女2。

男1　カフェバーだってね！
女2　え、うん
男1　カフェバーって俺最初なんのことだかわからなかったよ。なんか、おしゃれすぎて。金もないし、そんなとこ行かないし。「かふぇばー」って、響（ひびき）がさ、聞いたことないし。ホームランバー的なね
女2　え
男1　あの、ほらバーってね。バーってところしか最初聞こえなかったし
女2　また、野球？
男1　え
女2　甲子園とか二郎系とかホームランとか。コウヘイくんって野球部だっけ？
男1　え
女2　え、違うの？
男1　あ……うん
女2　そっか
男1　え、覚えてないの？
女2　え？
男2（声）　こっちがなんでしたっけ？
男4（声）　そっちがキリマンジャロで、そっちがグアテマラ

と、店の裏口の扉が開いて、男2と男4が出てくる。
男2は両手に紙コップ（いいコーヒー屋の持ち帰りでもらえる厚紙の感じ）を持っており、

男2　（男1に）こっちがキリマンジャロで、こっちがグアテマラ。（男4に）え、合ってます？
男4　合ってます合ってます
男2　（男1に）飲んでみろよ
男1　え
男2　全然違うぜ、なんかどっちかが苦くて、どっちかが甘いとか、ですよね？
男4　甘い？そこまで甘くはないんじゃないかな、ブラックだし
男2　でも、なんかが苦いって言ってませんでした？
男4　あ、ああ？ああ、酸味がね。酸味が特徴的っていう
男2　ねえ
男4　まあ、苦いっていうか。それだと、大体が苦いってことになっちゃうし

男2　まあ、飲んでみろよ、全然違うから
男1　違わないよ
男4　え
男1　違わないよ！お前に違いがわかるわけないだろ！
女2　……そんな言い方
男2　そうだよ
女2　え
男2　わからなかったよ、ダメかよ
男1　……。
男2　（男4に）わかったふりしてました、ごめんなさい
男4　ああ、いいんですいいんです。コーヒーってね、そういうもんですから
男2　また来てもいいですか？
男4　え、ああ、もちろん
男2　違いがわかる男になりたいので
男4　ああ、それは、
女2　それは、素敵だと思います
男2　ありがとうございます！
女2　また来てください
男2　はい！
女2　……コウヘイくん、またね
男1　……。

と、女2扉を開けて入っていく。

男2　（男4に）いい彼女さんですね
男4　あ、ええ、まあ
男2　（男1に）同級生なんだっけ？高校？
男1　……。
男4　……あ、じゃあ自分も戻りますね
男2　あ、はい！ありがとうございます。ご馳走になっちゃって
男4　いえ、荷物運ぶの手伝ってもらいましたし
男2　あれくらい全然。いつでも、呼んでください！なんならバイトでも
男4　あ、はは……またいつでも……じゃあ

男4も扉を開けて入っていく。
男2、両手に持っているカップから一口ずつ飲んで、

男2　わかんないな
男1　……なあ
男2　なに？飲む？
男1　今、彼女って言わなかった
男2　え？
男1　アキのこと彼女って！
男2　え、どういうこと？
男1　だから、なんか、なんて言ってたけ、アキがなんか言って、お前がなんかいい彼女さんですねって
男2　え、ああ
男1　言ったろ！いい彼女さんですねって
男2　言ったよ、言った。それがなんだよ
男1　奥さんだって話じゃなかった？
男2　え
男1　あいつ、奥さんが出身かなんかでこっちに来たみたいな
男2　タツキくん？
男1　そう！タツキ君！え、お前も名前で呼んでんの？
男2　まあね。メガネの店長タツキ君
男1　だからそのメガネ。アキのこと奥さんだって
男2　パートナーだよ
男1　え？
男2　パートナー
男1　……なっだ（なんだ）それ！！
男2　パートナーはパートナーでしょ
男1　なんだよパートナーって！日本人なら日本語喋れよ、なんだパートナーって！言ったことねえよパートナーなんて。なんだ、なんなんだカフェバーとかパートナーとかカタカナばっかり喋りやがっておしゃれか！それがおしゃれなのか！カタカナがおしゃれなのか！だいたい、あいつさ、俺が奥さんって言った時普通に受け入れてたよな？なのに、さっきお前が彼女さんって言った時も、全然すんなり受け入れてたよな？
男2　だから、まだわかんないじゃない
男1　何が！？
男2　奥さん？なのか彼女？なのか
男1　……なっだ（なんだ）それ！！彼女なら彼女だし、奥さんなら奥さんだろ！なんだパートナーって、誤魔化してんじゃねえよ。どっちかだろ、籍入れてんのか籍入れてないのか。結婚してんのか結婚してないのか……パートナーって……なんだよ……日本語で

男2　相棒？
男1　相棒か……「相棒か」ってなんだよ……意味わかんねよ……相棒なんて言ったことねえよ……相棒だろ……相棒……なんだよ結婚してねえのかよ……どっちだよ

もう疲れ果てた男1。

男1　なあ
男2　何？（コーヒー）飲む？
男1　俺とお前は相棒？
男2　違うね
男1　（舌打ち）、即答かよ……タケルは？
男2　まあ、近いね
男1　相棒に？
男2　そう、近い
男1　……タケルとセックスできないよな？
男2　まあ、多分
男1　もう、多分ってなんだよー
男2　意味わかんなすぎて
男1　わかんねえよ俺だってー
男2　……あ、好きだったの？
男1　ば、お前……お前ってやつは
男2　コウヘイは意外と古いね
男1　何が？
男2　価値観？結婚がどうとか籍がどうとかうるせいやい
男1　でも、俺もイケ好かないな
男2　え？
男1　タツキくん
男2　なんでだよ、仲良くしてたじゃない
男1　金持ちじゃないのに金持ってるフリしてるからそれまだ言ってんの？……普通に金持ってるって。こんなところでお店できるんだから
男2　あの時計、全然似合ってなかったし
男1　……あ、そう
男2　……コーヒー飲んだら？落ち着くよ
男1　飲まねえよ、夜だし

男2　え？
男1　知らねえの？コーヒーって飲んだら寝られなくなるんだぜ
男2　え、ほんとに？
男1　いや、まあ……
男2　嘘？
男1　嘘、ではねえけど、ほんと、なのかな？
男2　え？
男1　とにかく俺は飲まない

と男1が立ちあがろうとした時、
男3が下手側から再びやってくる。

男3　あ
男2　あ

男2が動き始めたその時、

男1　ストップ！はい、ストップ！
男2　……。
男1　絶対にストップ！俺、疲れてる。もう限界。

男2、男1にコーヒーを渡そうとする。

男2　ん
男1　……
男2　ん！
男1　わかった、わかったって

男2、コーヒーを男1に渡して、自転車からマクドナルドの袋を取り出し
どっかいく。

男3　何？あいつ
男1　ほんと、すいません

男3、男2が消えた方向を見て、大きな舌打ち。

男3　何それ？

男1　え
男3　今、渡されてたじゃん
男1　あ、えーっと、なんだっけな？
男3　え？コーヒーじゃないの？
男1　あ、いや、コーヒーなんすよ
男3　コーヒーじゃん
男1　コーヒーなんですけど、なんか種類が違うらしくて
男3　左右（さゆう）で違うの？
男1　あ、そういうことです、はい
男3　飲ましてよ
男1　え
男3　当てるわ
男1　あ、まあ、いいっすけど

男3、男1からコーヒーを受け取り、一口飲む。

男3　ふーん……そっちも

男3、男1からもう一個のコーヒーも受け取る。持っているものを交換で受けわたす形に。

男3　お……こっちが……グアテマラで……そっちがキリマンジャロ……じゃない？どう？
男1　あ……すいません。ちょっとわかんなくて
男3　え
男1　いや、種類が違うっていうのだけは知ってるんですけど、その、種類の名前までは、覚えてないっていうか
男3　なんだよ……先言えよ
男1　すいません

男3、男1にコーヒーを返す。再び男1は両手にコーヒー。

男3　このコーヒー、マクドじゃないよね
男1　そうっすね
男3　え、買ってきたの？
男1　あ、いや、ここ（扉）の人からもらって
男3　え、ここ店できたの？

男1　そうなんですよ、新しくできたって
男3　関係者？
男1　違います、違います。なんか知り合いだったみたいで
男3　へー
男1　高校の同級生が、戻ってきてこっちでお店やる的な？カフェバーらしいですよ
男3　へー、カフェバー。いいね
男1　あ……そうっすね
男3　もしかしてさ、あのメガネの？
男1　あー、そうですメガネの
男3　同級生なんだ
男1　あ、じゃない方で、もう一人、女性がいて
男3　あ、夫婦でって感じか
男1　夫婦……なんですかね
男3　え、違うの？
男1　それがわかんなくて
男3　……好きなんだ
男1　はい？
男3　付き合ってたの？
男1　え、察し良すぎないですか？
男3　わかるよそれぐらい
男1　さすが、違いがわかる男
男3　付き合ってた彼女が男連れて地元戻ってきたんだね～
男1　付き合ってた……んですかね
男3　え、また？
男1　いや、俺はね結構そのつもりで喋ってたんですけど、なんか全然噛み合わないっていうか
男3　ちょっと待って。そのつもりっていうのはどのつもり？当時、付き合ってたつもりで喋ってて実は付き合ってなかったの？それとも、今現在、元々付き合ってたつもりで喋ってて、付き合ってない感じになってたの？
男1　え？
男3　え、ごめん僕もなんて言ったかわかんないや
男1　すいません
男3　うん、整理しよう。まず第一段階
男1　はい
男3　君の高校生時代、その彼女と君は付き合っていたのか付き合っていなかったのか

男1　はい
男3　っていうか、それが最も重要な問題だね
男1　はい
男3　君の意見は、付き合っていたと
男1　そう、ですね
男3　根拠は？
男1　根拠？
男3　根拠。大事だよ、根拠なき「付き合ってた」は完全にストーカーだから
男1　ストーカー？え、そんな大きな話ですか？
男3　ばかちん！
男1　え？
男3　全然、大きな話じゃないよ。君みたいな加害者意識のないその小さな一歩がストーカーへの大きな一歩になるんだよ
男1　ごめんなさい。えっと、根拠……一緒に帰ってました、学校から
男3　頻度は
男1　えっと、結構多かったと思います、週3とか
男3　なんともいえない。次
男1　えっと、週末遊びに行ったりも
男3　何回？
男1　えっと3回
男3　場所は？
男1　映画館、動物園……映画館
男3　なんともいえない。次
男1　えー……
男3　もう終わり？
男1　いや、あるんですけど……あるんですけどね。思い出
男3　いいじゃん
男1　でも、彼女全然覚えてなくて……覚えてなさそうで……家庭科室がね、あったんです。グラウンドに面した。家庭科室の窓の外には花壇があって。その花壇を挟んで、僕はね最初、名前も知らなかった彼女を見つけたんです。部活の途中で、僕サッカー部だったんですけど……そう、サッカー部だったのに、彼女はそんなことも覚えてなくて……部活で、僕はどうせ、そう、レギュラーなんかにはなれないような、もちろん甲子園なんか行けないんですけど、いや、まあ、サッカーなんで甲子園なんかないんですけど……そんなどうしようもない選手だったんですけど、それでも、一生懸命やってて、まあ、ある程度はちゃんとやってて……それで、そう、まだ結構体育会系な感じが残ってて、すっごい走るんですよ、とにかく走らされて、今考えるとそれがなんのためにやっていることなのかさっぱりわからないで

すけど、根性論っていうか。走って走って意味もわからず走って、サッカー部なのにボールなんか触らせてもらえず走って……その日、すっごい暑くて、今考えたらそれも温暖化進んでたっていうか、ほとんど熱中症みたいになってたっていうか、それで結構朦朧として花壇の端に突っ込んだんです。でも、レギュラーでもない端っこの部員なんてぶっ倒れてても気づかれないっていうか。地面見ながら、間近の地面見ながら、「うわー地面だ。部活なんかやってどうすんだよ、帰りてー。運動神経いいやつもれなく老化が早くならねえかなー。そんくらいじゃないと割に合わないなー」とか思ってたら、水がジャアって上から降ってきて。くるっと振り返って上向くと、彼女がヤカンで。ほら、家庭科室って無駄に古いヤカンあるじゃないですか、あれに水入れてかけてくれてたんです。窓開けて、その時の、料理の時の、油の匂いが香って、隣には赤色の花と甘い香りがあって。彼女の顔がね、見えたんです。そんな……そんなことがね、あったんです

男３　……初恋の人なんだね

男１　……はい

男３　……先に謝っておくと、全然共感できなかった、ごめん

男１　え

男３　ちょっと、ごめんね、僕にとっては遠い昔のことで、その体育会系を腐す感じとか、なんかちょっと気になっちゃった。うん。

男１　あ、そう、ですか

男３　きっと、彼女もそういう感じなんじゃないかな

男１　え

男３　君にとって、というかまあ人類にとって、は言い過ぎか、男にとって……うーん、まあ君にとって、初恋の思い出がとても大切だということはわかった。し、運動神経いいやつへの妬み、嫉みがあるっていうのは理解しました。かろうじて、かろうじて僕、寄り添えます、その気持ち。だがしかし、さすがに鮮明すぎるっていうか

男１　鮮明？

男３　地元から離れて、遠い土地で出会った人と、もう一度地元に帰って、お店を始めようなんていう時の人間に、そんな過去の思い出重要じゃないから。結構頑張らないと思い出せないから

男１　そう、ですね、考えたら、そうですね

男３　話してくれてありがとう。結論、君と彼女は付き合ってはなかった

男１　……はい

男３　おめでとう

男１　え

男３　過去の精算は済んだから、問題は今だ

男１　今？

男３　今、君は好きなのかい？
男１　今ですか？
男３　彼女が好きなのかい？
男１　いや、ちょっとわからないです
男３　僕は、好きなんだよ
男１　え
男３　彼女が。僕の彼女のことが
男１　はあ
男３　なのに引っ越すっていうんだこの街から！！
男１　……。
男３　あ、ごめんね、君の話聞いたから僕も喋っていい？
男１　あ、どうぞ
男３　僕はね、君が嫌いな体育会系全盛期の時からこの街に住んでるの。たくさんの古着屋が潰れては消えて、その度に新しい店ができて。新しい人が来ては消えていく。たしかにそういう場所かもしれない、でもそれは変わらない人がいるから成り立ってるの。変わっていく街の片隅には変わらない店があって、変わらない人が立っていて、いつだってそこにあるというその確信がこの街をこの街たらしめているんだよ。昼まで寝て、そこから夜中まで働いて、三角公園に集まって、夜通し呑みながら喋って喋って……喋ることもなくなった深夜三時に一杯のブラックコーヒーを呑むの。夏でもホットで。その一杯のために毎日毎日集まってたんだよね……そしたら詳しくなっちゃったよコーヒーに。そういう人生をね、まあ大半は過ごしてきたわけ、わかるかい？
男１　はい、なんかすごいわかりそうな感じがします
男３　そうだろ？
男１　はい
男３　なのに、引っ越すっていうんだよ。いや、僕は引っ越すことにどうこう言ってるわけじゃないんだよ、そうじゃないんだよ僕の言いたいことは！……古いって言うんだ
男１　え
男３　まあ正確には、古くなっていくんじゃないかって。このままここに住んでいたら……でも、それはそういうもんじゃないか？一つの街に住んで生きていくっていうことは、生活をするということは。僕だって昔は、仲間たちとともに公園を牛耳っていたさ、でも今はどうだい？君みたいな若いやつや、他所から来た人たちが新たに公園に来るわけだよ。僕たちがせっせと山を作っていた砂場に、新たに山も川もトンネルも作られるわけ。でも、僕たちは寂しくないんだよ。なんでかわかる？
男１　え

男3　街には新しい公園があるからだよ。それまでの居場所だったそこにはもういられないけど、いきつけのバーができたり、友達が居酒屋始めたり。そうやって愛をもって、リズムをもってさ、生きていくのが、この街に青春を捧げた人間のあるべき姿だと思わないかい？
男1　そう、すね
男3　なのに彼女は僕に古くなっていくんじゃないか？って言ったんだよ。古くなっていくことは、いけないことなのか？新しくなる街で古くなっていくことはいけないことなのか！……君はなんなんだ
男1　え
男3　君はどうしてここにいるんだい？
男1　あ、いや、それは……
男3　君の好きな彼女は、遠い土地に行く決断をして、また戻ってくる決断をしたわけだ。誰にでもできることじゃない、すばらしい。僕はね、うれしいんだよ、その彼女がこの街に帰ってきてくれる選択をしてくれたことが。それに反して、君はこんなところで昔の思い出にしがみついて
男1　いや、別にしがみついているわけじゃないですよ。たまたま、たまたま思い出しただけで
男3　公園からも追い出されて、何をしているんだこんなところで
男1　友達を待っているんです、急にいなくなった友達を……っていうか、あれ？あなたタケルの
男3　うん？
男1　タケルの部屋の前にいるのを見たって
男3　タケル？

男4が扉から出てくる。口にはタバコを咥えている。

男4　（二人を見てタバコを外し、戻す）ああ
男1　……どうも
男3　あら、さっきは
男4　ああ、どうも
男3　ごめんね、さっきは
男4　いやいや
男3　聞いたよ、お店やるんだって？カフェバー
男4　あ、そうなんですよ、ありがとうございます
男3　今は、なにしてんの？
男4　あ、いや今日はもう帰ろうかなっていうところで
男3　なんか話してたらさ、コーヒー飲みたくなっちゃったな。（男1に）ねえ

男1　あ
男3　奥さんは?もう帰ったの?
男4　あ……あ、そうですね
男1　……。
男3　あー、そっか
男4　……あ、コーヒー淹れましょうか?
男3　あ、いいかい?
男4　まあ、あらかた（オープン）準備は済んでるんで、お客さん第0号的な感じで
男3　あ、そうかい?なんか悪いな
男4　いやいや全然。（男1）飲みますか?
男1　あ、僕は
男3　飲もうよ、せっかくだし
男1　あ、いや

男1のことは気にも留めずに、扉の方に向かう男3。

男3　僕コーヒーには厳しいよ
男4　え、お詳しいんですか
男3　君が生まれる前からコーヒー飲んできているからね、多分
男4　お酒もありますけど
男3　それは悪いよなんか

男二人扉の中に消える。残された男1。
両手に持っているコーヒーを見る。
重いような軽いような、なんだかよくわからない。
飲んでみる。一口ずつ。

男1　わかんないな

男3が扉から顔を出している。
男1、もう一度両方飲む。

男3　飲んでんじゃん
男1　……俺わかんないっす
男3　お酒も出してくれるって、おいでよ
男1　あの人に会いにきたんじゃないんですか?

男3　え、ああ、まあいいよ、どうせ機嫌悪いし、要領得ないしいけスカないっす
男1　彼？
男3　はい。全然いけスカないっす
男1　多分だけどね、あれ結婚してないよ
男3　え
男1　たぶんね
男3　え、なんでわかるんですか？
男1　そんなの見ればわかるよ
男3　さすが、違いがわかる男……
男1　おいでよ、ここを新しい場所にしようよ

男1、そのまま、扉の中に入っていく。それを見送って

男3　バカだなー

男3も扉の中へ。

誰もいなくなった路地。誰もいないと静かだと思っていた路地にもやっぱり夜の音がなっていることが分かる。騒々しい夜の街の音。

少しして、男2が戻ってくる。
手にはマクドナルドの紙袋、結局食べ損ねている。
扉の方を見て、

男2　コーヒー持ってくなよ……

おそらく、物陰から見ていたのだろう。
と、女1が階段からおりてくる。
先ほどとは打って変わって部屋着にメガネ。手にはゴミ袋。

女1　あ
男2　ああ
女1　……あいつ、いない？
男2　あいつ……ああ、店の中に
女1　あ、そう

と言いながら降りてきて、ゴミ袋を入れるゴミ箱にゴミを入れる。

女1　あんた達さ、ずっとここにいるわけ？
男2　え。あ、すみません
女1　いや、いいの。さっきはごめんね、なんかカッとなっちゃってて
男2　いや、それは俺らも
女1　友達を待ってるの？
男2　え？
女1　ほら、タケルくん
男2　あ、はい、そうです
女1　隣の部屋のタケルくん
男2　うるさくして（すみません）
女1　たしかに、あれはうるさいよ「タケルー」って。今時、扉ドンドンやってタケルーって。(笑いながら)なかなかいないよ、ピンポンの意味がないじゃない、おっきい声で呼んで
男2　焦っちゃって
女1　四日連続で？
男2　四日連続で。こんなこと一度もなかったんですよ、あいつ結構ちゃんとしてるやつで、三分遅れるだけでも遅れるって連絡してきて。大体そう言う時、コウヘイだって公園についてないし、僕はまだ寝てるし。いっつもなんですよ、それが大体で。でもあいつは連絡するんですよ、三分遅れるって
女1　（ふふっと笑う）
男2　変なやつですよね
女1　プレッシャーをかけてるんだよ
男2　プレッシャー？
女1　三分遅れるっていうのをきっと、20分前くらいには連絡しているんでしょ、そのタケルくんは
男2　そうですね、多分
女1　だから、「俺は集合時間より三分遅く着くからな」っていうのを、23分前に言っておくことで、お前らが遅いのは分かってるけどちゃんと来いよっていう、プレッシャーをかけてんの
男2　そうですかね？
女1　だって実際にあなたそれで起きてるんでしょ
男2　ええ、まあ
女1　仲良しなんだね君たちは、うらやましいよ
男2　仲良しだなんてそんなそんな
女1　なんで謙遜するのかわかんないけど

男2　仲良しじゃないですよー
女1　ふーん。……お店できたの？
男2　え
女1　あなた、さっきお店の中にって言ってたから
男2　ああ、そうなんですよ。カフェバーが
女1　関係者？
男2　え
女1　関係してるの何か、あなたがここの店の
男2　あの！
女1　え、なに
男2　テツヤです
女1　え？
男2　僕、テツヤです
女1　あ、名前
男2　はい、あなたあなたって言われてたから。あなたってあんまり言われたことなかったし、あなたって(爆笑)あなたってなんかおもしろいですね
女1　え、そう？
男2　響きがむず痒い感じが
女1　……テツヤくん
男2　あ
女1　何？
男2　テツくんでもいいですか？
女1　テツくん
男2　あー
女1　あってる？
男2　いいです、すごくいいです
女1　良かったです、それなら
男2　……アイさん……アオイさん……アカリさん……アケミさん……アサ……アサミさん……
女1　あ、名前あてようとしてる？
男2　あ、お聞きしてもいいのか迷って
女1　いいよ、聞いてよ
男2　お名前なんて言うんですか？
女1　ユキ
男2　ユキさん
女1　はい
男2　ユキさん

女1　はい？
男2　すごくいい名前だと思います
女1　あ……ありがとう
男2　雪のような名前ですね
女1　うん、そうだね
男2　素敵だと思います
女1　うん、ありがとう
男2　ユキさん
女1　え
男2　ユキさん
女1　はい
男2　なんで、あんなやつと
女1　え？
男2　あいつ、でかいやつ
女1　ああ
男2　なんであんなやつと一緒にいるんですか！
女1　え？
男2　僕聞いちゃったんです、ユキさんとあいつが部屋で喧嘩しているのを。タケルを呼びに部屋まで行ったら、隣の扉からすごい、すごい怒鳴り声がしていて
女1　そんな、大袈裟だよ
男2　そんなことないですよ、すごい大きな声だった。撃たれたみたいな
女1　撃たれた？
男2　バーンって。鼓膜がバーンって
女1　大袈裟
男2　びっくりして、え、俺なんかしたかなって思って。最初なんのことだかわからなかったら、わーって隣の部屋から聞こえてきてて、それにユキさんも負けじと言い返してて
女1　あー、まあ最近ちょっとね
男2　ちょっとじゃないですよ、あれは
女1　まあ、そうか、そうかな？
男2　9：1（キュー対イチ）でユキさんの勝ちだと思います
女1　え、聞いてたの？
男2　聞いてないですよ、聞こえてきたから聞いてただけで。引っ越す引っ越さないって
女1　すごい聞いてるじゃん
男2　僕はほぼ賛成です、ユキさんに
女1　私に？

男2　飽きたって、言ってました
女1　え
男2　飽きたって、生活していくことに飽きたのって
女1　そんなこと言ったかな
男2　言ってましたよ。「(でかい声で)飽きたの！ここで生きていくことに！」って
女1　びっくりした、夜だよ
男2　再現ですよ、その時の
女1　たしかに、声でかいかも……飽きたってひどい言葉。彼は悪い人じゃないんだよ
男2　うう(と何かしらのポーズ)
女1　何？
男2　不満はあるけど我慢して聞くポーズです
女1　(少し笑う)
男2　続けてください
女1　……ずーっと住んできた街だものね。私は別に彼のことをどうのこうの言ったつもりはなかったけど、彼は自分のことを言われたと思ったのかもしれない。だから、ほら、バンって頭に血が上って。でも、おもしろいのは彼はすごい、なんだろう理詰めっていうか、すっごい怒ってるのになんかちゃんと理で喋ろうとしてくるというか。大変そうだよね、人生生きていくの。感情で怒れないんだよ。本当は言いたくないことをいっぱい言いながら言いたいことを言ってるの。分かる？
男2　全然
女1　だよね。でも私もそう、わからない。感情があって言いたいことがあって……飽きたって言ったんだ私。でも、そうなんだな飽きたんだな。飽きたからもう違うどこかに行きたいんだな。それを色々こねくり回して、誰かのせいにして、街のせいにして……私の住んでた所ってね、新しい街っていうか、子供の頃は本当に何もなかったし、小学校なんか通うためにすごい遠いところに……でも、それは田舎ってことじゃないの。少し高い坂を登って下った町には、大きな家がいっぱい建ってて、コンビニも点在してて……そこの町には小学校が三つもあったけど、私の地区にはなかったの。だから、歩いて長ーい時間歩いて、通ってたんだけど、そしたら途中でね、でっかいイオンが近くに急にできて、なんにもなかった場所が急に街になって。ユニクロとかでかい本屋さん?とか雑貨屋さん?とか、なんか変なしゃぶしゃぶ専門店みたいな、食べ放題みたいな……愛着ないの私。地元への愛着。そもそも転校しちゃってるし、地元のお祭りとかそういうのもなかったし、地域の交流とかも……だから、この、愛着が湧きそうな街に来て、働いてみて、最初は全然馴染めなかったけど、だんだんわかってきて、今の彼とも知り合って……なんか満足しちゃったのかな

男2　満足ですか
女1　満足。若い頃に来て、なんか精一杯生活してみて、色々経験させてもらって、でもいいかな。もう。ご飯もそんなに食べれなくなってきたし、なんか最近は観光地？みたいになってきて、カタカナとか英語とかが増えてきたり、変な、まともな商売しない店が増えてきてさ
男2　変な店、おつまみが高い
女1　そうそう
男2　俺も嫌いっす
女1　……なんか居心地が悪くなってきて、昔はそういう変化が醍醐味なんだけどなーとか思ってたけど、今は無理だな。頭では、当然こうなってくよねーってわかるんだけど、感情がもう、その変化を楽しむことに飽きて……結局私は場所に愛着なんてもてないのかな……うらやましいな
男2　俺は好きです、ここ
女1　好きそう
男2　でも、そう思ってただけかもしれないっす
女1　え？
男2　タケルがいなくなって、俺ちょっとスッキリしてるっていうか
女1　何それ？嫌いだったの
男2　違いますよ、どっちかっていうとまあ、好き？っていうか……言わせないでくださいよ
女1　言わせてないけど
男2　好きとかじゃなくて、高校から一緒なんで、なんかずっとだべってるのが当たり前かなって思ってたんですけど。あいついなくなってから、なんなんだこの時間みたいな
女1　ほう
男2　なんか、とりあえず集まって、そんなに食べたくもないマクド食べて。なんなんだろうみたいな、コウヘイめっちゃ話しかけてくるし
女1　あー、もう一人の
男2　なんか、めっちゃ話しかけてくるし……こいつ誰なんだっけみたいな。なんで一緒にいるんだっけみたいな……そういえば、俺この街から出たことないっすわ。そんな発想すらなかった
女1　……タケルくんがいたからここにいたってこと
男2　に、僕、気づいたんです。びっくりしました。僕ここにしかいたことないって
女1　マクド食べて
男2　なんか買ってくるんすよ
女1　おごりでしょ？

男2　おごりだから食べるっすもん。金ないもん
女1　……それ（男2が持っている袋を指して）
男2　え？
女1　まだ入ってるの中身？
男2　え、まあ
女1　食べてないの？
男2　だって、食べちゃダメってユキさんが
女1　ああ、そうか
男2　食べちゃダメですか？
女1　ダメだよ、他人の家の前だよ
男2　そうですよね……
女1　……中なに？
男2　え？
女1　中身
男2　ハンバーガーです
女1　それはそうでしょ、その袋だし。種類、パンとパンの間には一体なにが挟んであるのでしょうか？
男2　ああ、それは、ダブルチーズバーガーと
女1　ダブチね
男2　ビック……バーガー
女1　ビッグマックね
男2　そうですそうです
女1　ちょうだいよ
男2　え
女1　食べないんでしょ
男2　いや、食べないっていうか

女1、男2からマクドナルドの袋を取って、階段の方へ。

男2　他人の家の前で食べちゃダメだって
女1　家の中は？
男2　家の中？
女1　ダメ？私の、家の、中
男2　それは、ダメじゃないっす
女1　そうだよね
男2　あげるっす
女1　ありがと

男2、取られたマクドナルドを諦める。

男2　……あ
女1　何？
男2　雨が
女1　え？
男2　雨が今、ポツって
女1　ああ、雨

二人、上を見上げる。

女1　ねえ
男2　はい？
女1　一緒に食べる？
男2　……え
女1　一緒に

男2の振り返った先には、螺旋階段に立つ女1。手にはボロボロのマクドナルドの袋。ビルの隙間を夜の涼しい風が通ったような気がする。
静かになるとやっぱり街の音がして、それが今夜は耳に残る。
雨がポツポツと降り出して、やがて大降りに。
扉の奥からは男たちの笑い声がしている、気がする。

暗転

第3場

それからおよそ一ヶ月の時間が経過する。
一ヶ月！気づけば経ってしまいそうだが、意外と変化のある時間。帯になんたら襷になんたら。

昼過ぎの時間帯。一ヶ月経っても夏。夏の昼だからあっついあっつい。
路地裏も少し変化している。
扉の横にはカフェバーの店員が休憩できるような丸椅子が置かれている。
自転車は相変わらずそこにある。

その丸椅子に女2が座ってサンドイッチを食べている。女2が食べているとまさにそれはサンドウィッチといった様子。パンの表面が焼かれているちゃんとしたやつ。パク、モグモグ、パク、モグモグ
と、階段の方から声がする。

男3（声）だからもうちょっと待ってくれてもいいじゃない
女1（声）待つって何、私十分待ってる。もう一ヶ月
男3（声）一ヶ月なんてすぐだよ、ほら思い出してよ。高校生の夏休みあんなに短かったじゃない
女1（声）高校生の一ヶ月なんてどこを切り取っても短いよ

階段から女1と男3が降りてくる。

女1　（女2を見つけて）あ
男3　あ、どうも

女2、応えたいのだが口にサンドウィッチが。表面焼いてある固めのサンドウィッチが入っているからモゴモゴ。焦って、立ったら膝の上に載せていたハンカチが落ちる。その上のパン粉も落ちる。アワアワ。

女2　（ゴホゴホと咳き込む）
男3　え、大丈夫
女2　（ああ、大丈夫なんですけどというジェスチャーと音）
男3　え、何？
女2　（こっちは大丈夫なんで、そっちの会話を続けてもらったらという意思表示）

男3　なんて？
女1　とにかく！もう待てないから
男3　え？
女1　夏休みは終わるの、いい？

女1、なぜか女2を睨みつけてから、路地から出ていく。

男3　（女1に）おい

女2、ゴホゴホいっている。

男3　大丈夫？（といいながら落ちているハンカチを拾ってあげる）
女2　（落ち着いてきて）大丈夫です、ごめんなさい
男3　いや、こっちこそごめんね、急に声かけちゃって
女2　いや、全然です、ありがたいです
男3　ありがたい？
女2　常連さんなんで
男3　まあ、最近あんまり行けてないけど
女2　そういえば、そうですね。どうして？
男3　聞くねー
女2　えー？
男3　いや、あいつが
女2　あいつ？
男3　ほら、バイトでさ、最近働いてるじゃん
女2　ああ、はいはい
男3　それで、なんか行きにくくなって
女2　え、なんでですか、いい人ですよ
男3　いや、僕は別にいいんだけどさ、すごい威嚇してくるからさ
女2　それは、ごめんなさい
男3　いや、アキちゃんのせいじゃないけど
女2　……追いかけなくていいんですか？
男3　え
女2　彼女
男3　ああ、いやね、今日は待ち合わせしてるから
女2　待ち合わせ？
男3　そうそう
女2　こんなところで？

男3　そうそう……どう、お店順調？
女2　いや……まあ、どうでしょうか
男3　あれ、聞いちゃダメだった？
女2　いや、私あんまりわからないんで。彼にお任せしちゃってて
男3　彼ねー
女2　夢だったんですって、カフェバーやるの
男3　変な夢だよね
女2　そんなことないですよ、素敵じゃないですか
男3　素敵かい？
女2　素敵ですよ、そのためにカンサイまで来て
男3　そういえば、なんで？
女2　え
男3　なんでわざわざこっちに来て
女2　あー
男3　わかんないけど、普通トウキョーとかの方がいいんじゃない？そんな、カフェバーをやりたいなんて思ってる人は
女2　ほんとは、ほんとはねそうなんですけど、お父さんが
男3　お父さん？誰の？
女2　私の、私のお父さんが、お店やるならこっちに来いって
男3　カンサイに
女2　そうです。でも、彼はそれでもお店やりたいってなって……素敵じゃないですか
男3　え、ちょっと待って全然わかんない
女2　だって、夢だったトウキョーでのお店を諦めてでも、カフェバーをやりたいからって
男3　違う違う、うん？お父さん？
女2　はい？
男3　アキちゃんのお父さん？がなんでてくるの？
女2　え、だってお店をするから
男3　え？
女2　お店をするって、彼が言って。お店をしたいなら、お父さんに頼まなきゃって。それで、お店をすることになったんです。
男3　あーえっと、お店をするって言ったのは、タツキくんだよね
女2　そうです
男3　で、えっとお店をしたいならお父さんに頼まなきゃっていうお父さんはアキちゃんのお父さんなんだよね
女2　そうです

男3　それで、お店をすることになったんだよね
女2　そうですよー
男3　そうだよね。で、お店をやるならこっち来いって言ったのは、アキちゃんのお父さんで……うん、分かってきた分かってきた
女2　あ、分かってきました？
男3　つまり、アキちゃんのお父さん、このお店をやるには必要不可欠な人物。かつ自分がお店に立っているわけではない、つまりオーナーってことだね
女2　あ、そうです。そうです。
男3　わかったよ、僕は完璧にわかっちゃったよ。タツキくんは逆玉ってことだね
女2　え？
男3　ああ、いや、いいんだよ。自分の夢を叶えるためにチャンスを掴む。誰にでもできることじゃないよ
女2　え？ええ、まあ
男3　そうか……やっぱりね。似合ってないって思ってたんだよあの時計
女2　ああ、時計。父のプレゼントの
男3　お父様！素敵なお父様だね！
女2　ええ、そうかな？
男3　そうか、逆玉か……うらやましい

と、路地の入り口から女3がやってくる。

男3　あ
女3　ああ
男3　中崎さん？
女3　そうですそうです、その節は
男3　いやいや、こちらこそわざわざご連絡いただいて
女3　……あ、どうしましょう
男3　ああ、そうですね
女3　私、部屋の鍵持っているので
男3　ああ、じゃあ、一度部屋に行きますか？
女3　そうさせていただけると
男3　いやいや、こちらこそ……あ、じゃあ行きますか
女3　あ、はい

男3が先導して、女3と共に階段を登っていく。途中、先にどっちがいくかみたいな感じになって、「あ。」「あ、すみません。」「あ、いや」みたいな感じもあったりするかも。

女2　ギャクタマ……ギャクタマ？

よくわからない言葉。
再びサンドウィッチを食べ出す。モグモグモグ。
隣の扉が開く。男2がゴミ袋を持って、出てくる。

男2　あ、休憩お疲れ様です

女2、応えたいのだが口にサンドウィッチが。え、また？後ろから話しかけるから。モゴモゴモゴモゴ。また、ハンカチが落ちる。

女2　（ゴホゴホと咳き込む）
男2　何食べてるんですか？（ゴミ捨てに行ってるから遠目から見て）
女2　（サンドウィッチですという三角形を示す）
男2　え、ジェスチャーゲームですか？
女2　（サンドウィッチサンドウィッチ）
男2　おにぎり！
女2　（違う違うもっと、パンのなんか、洋風洋風な感じ。洋風な三角形）
男2　あ、サンドウィッチ！
女2　（そう！そうです）
男2　へー、中身は？
女2　それは、無理です
男2　え
女2　ハムとレタスとマヨネーズです
男2　美味しそうだね
女2　慣れてきましたか？お仕事
男2　そうだね、難しいね
女2　どっちですか
男2　慣れては来るけど難しいんだよ
女2　そうですか？
男2　ほら、コーヒーもさ、お湯入れるって考えたら簡単だけど、美味しいかどうかは別でしょ
女2　ああ、たしかに

男2　俺の淹れるコーヒー美味しくないもんね
女2　ですね
男2　やっぱり、向いてないかな
女2　まだ一ヶ月なんだから、それぐらいだと思いますよ普通
男2　そう？
女2　そうですよ。お手伝いいただいて助かってますよ、たぶん
男2　そうだといいんだけどね、こっちこそ本当にバイトすることになるとはで、助かってるし
女2　そろそろレジとか手伝ってくださいね
男2　えー、難しいじゃんレジって。現金だけだったらいいんだけど
女2　現金なんか払う人いませんよ今時
男2　そうかい？現金はないのかい？
女2　いや、あるっちゃあると思いますよ、たぶん

男2、自転車の方に行って、ジロジロ見ている。

女2　……そんなに気に入ってるんですか
男2　え？
女2　自転車
男2　気に入ってるっていうか、おしゃれじゃん
女2　おしゃれ？そんな普通ですよ
男2　そうかい？
女2　テツさんにめちゃくちゃ乗られてたって言ってましたよ
男2　鍵かかってなかったから……今は鍵かかってるね
女2　鍵かかってないと盗まれるよって、あれからすごい気をつけてるみたいです
男2　俺は盗んでないけどね、まあ、そういう人がいてもおかしくはないよね、ここでは
女2　だから、最初に鍵かけてないことに気づいたのがテツさんたちでよかったですよ、ほんとに
男2　……買い出しが不便に
女2　え？
男2　買い出しが不便になったってテンチョーが言ってたよ。鍵をいちいち持ってって、開けたり閉めたりしなきゃいけなくなりましたって
女2　ああ、確かにね。両手ふさがってると大変だし
男2　そうだよね……でも、スーパーちょっと遠いから歩きだと大変だしね
女2　そうなんですよね……
男2　俺……あとで買い出しにいくんだよね

女2　あ、そうなんですか？
男2　うん……
女2　あ自転車使います？
男2　あ、いいの！
女2　いいですいいです、あとで鍵の場所教えときますね
男2　助かるよほんとに

女2、落ちてしまったハンカチを拾って、

女2　あ、そういえばさっきあの人に会いましたよ
男2　あの人？
女2　あの、ほら、でかい、いかつい、名前なんだっけ……
男2　ああ、あいつ？
女2　分かります？常連さんだったのに、テツさんのせいで行けなくなったって
男2　いいのあんなやつ来なくて
女2　お知り合いだったんですか？
男2　全然知らない
女2　あ、そうですか
男2　何話してたの？
女2　えーと、なんでしたっけ？
男2　覚えてないの？
女2　あーっと、ギャク……
男2　ギャク？
女2　がタマが……なんか……みたいな
男2　全然わかんない
女2　あと……なんか待ち合わせだって……女の人と
男2　女？女！？
女2　あ、でも彼女さんじゃなさそうな人と
男2　え？
女2　彼女さんっぽい人とは喧嘩してて
男2　いいじゃん
女2　別の女の人がこっちから来て、マンション上がって行きましたよ？
男2　え、このマンション？
女2　ええ、階段をお二人で
男2　え、あいつここ住んでないけどな
女2　やっぱり知り合いじゃないですか
男2　知り合いじゃないよ、知っちゃっただけで……誰だろうな

男1が路地の入り口からやってくる。

男1　お
女2　あ、コウヘイくん
男1　あ、うん。（男2を見て）お前、本当に働いてんのな
男2　え、うん、もちろん
男1　最近、見ねえと思ったら
男2　まあね、カフェバーだから、昼から夜まで働けるから。コウヘイもお店おいでよ
男1　行かねえよ、行くわけねえだろ
女2　え？
男1　あ、いや、そういうわけではないっていうか
男2　ひどいよ、お前にめっちゃ呑まれたって店長言ってたぞ
男1　店長？
男2　タツキくんだよ
男1　ああ、いや、あの日はちょっともうわかんなくなってたっていうか
男2　普通常連になるけどな、（女2に）ねえ
女2　そうだよ、来てよ。思い出話しようよ
男1　……覚えてないけどね
女2　うん？
男1　あ、いや、あの日はたまたましょうがなくっていうか、トシキさんに呑まされて
女2　あ、そうそう、トシキさんトシキさん
男2　トシキさん？
女2　ほら、さっき話してた
男2　ああ、あいつ？
男1　そう、トシキさん。お前が謎に嫌いなトシキさん
男2　嫌いなわけじゃねえぜ、嫌なだけで
男1　嫌いじゃねえかよ
男2　何？仲いいの？
男1　別に仲良いってほどでもないけど……あ、お前さちょっとどっか行っとけよ
男2　え、なんで？
男1　ここで、待ち合わせしてんだよ、トシキさんと
男2　え、なんでよ？
男1　知らないよ、ここで待っとけって
男2　あやしいー、犯罪関連だ犯罪関連の何かだ

男1　お前と鉢合わせたらまた面倒なことになるから
女3（声）　本当に色々ご迷惑をおかけしました
男3（声）　いやいや、全然こうしてちゃんと返してもらいましたし
女3（声）　引っ越し……というか処分も引き受けてくださって
男3（声）　いや、それは本業ですから

とか、なんとか話しながら、男3と女3が階段から降りてくる。
男3の手には茶封筒。

男3　あれ、お揃いで
男1　お疲れ様です
男2　……。
男3　あ、はい、ご紹介します。（女3）中崎さんです
女3　え、あ、中崎です
男1　……。
男2　……。
女3　……。
男3　あれ、知り合いじゃないの？
男1　いや、知らないっす
男3　あれおかしいな……中崎くん知り合いだって言ってなかった？
男1　中崎くん？
男3　あれ？嘘？
男1　（男2に）誰、中崎って
男2　……ナカ……サキ
男3　え、君たちそれでここにいるんじゃないの？
男2　あ、タケル
男1　え
男2　中崎タケルだ
男1　え、そうなの
男2　うん
男1　え、なんで忘れてんだよ
男2　コウヘイも忘れてんじゃん
男1　俺はそもそもしらねえもん、タケルが中崎だって
男2　え、あ、そう
男1　そうだよ、いや、厳密には聞いてたかもしれないけど、名前呼びだから基本は。一回も呼んだことないでしょ
男2　俺だって呼んだことないよ

男1　呼んだことなくても付き合い長いんだから苗字くらい覚えてるだろ
男2　コウヘイだって付き合い長いって言ってたよ
男1　そんなこと言ったか？
男2　言ってたよ、俺たち意外と長いよなって
男1　でも、結局それはお前の方が長いわけだから……
男3　仲、良すぎかよ！……うるさいよ。
男1・2　……。
男3　えー、改めて、中崎くんのお姉さんの……お姉さんです
女3　あ、はい、タケルの姉です
男1　どうも
男2　あ、どうも
女3　……君が、テツヤ君だよね
男2　え、あ、はい
男1　あ、知ってるんすかこいつ
女3　いや、写真でね見たことあって
男2　あ、どうもっす
女3　（男1を見て）
男1　あ、コウヘイです
女3　コウヘイ？
男1　あ、いや、タケルとはこっち出てきてから知り合ったんで
女3　ああ、高校一緒とかじゃないんだ
男1　あ、そうっすね
女3　へー
男1　……。
男2　……。
女3　……。
男3　あ、じゃあ、そろそろ
女3　あ、はい

男3、路地から出ようとすると、

男1　あれ？
男3　何
男1　いや……タケル知らないって
男3　え
男1　タケルのこと知らないって言ってなかったですか？
男3　え、ああ、いや、名前で言われたから

男1　え
男3　タケルって言われても僕はわからないよ。彼は僕の中では中崎くんだったし
男1　ああ、そうか
男3　逆のことが起こってたよね、僕は苗字で呼ぶし、君たちは名前で呼ぶし
男1　ああ、はい
男2　なんですかそれ？
男3　……え
男2　その封筒
男3　敬語じゃん
男2　バイトなんで
男3　別に僕客じゃないけど
男2　なんですか！その封筒
女3　あ、それは……
男3　……答えたくなさそうだよお姉さん
男2　……ダメですか？
女3　あ、そうですね……
男2　僕、タケルの友達で、タケルいなくなってからもう一ヶ月経ってて、心配してて。（男1に）なあ
男1　あ、うん
男2　だから、なんかどこ行ってるとか知ってるとかあれば、なんか知りたいし、こんなお客様の方がタケルのこと知ってるのってなんか納得行かないというか
男3　（女2に）アキちゃん、バイトに敬語の使い方教えといてね
女2　あ、はい、すみません
男1　いや、でも、まあテツの言う通りっていうとあれですけど、確かに、なんで、っていうか、なんでお姉さんがここにいるのかっていうか……
女3　忘れてたくせに……
男1　え
女3　忘れてたでしょ、あなたたち！
男1　……あ、いや、忘れてたわけじゃ
女3　苗字だから知らなかったとか言いたいわけ？
男1　え
女3　私、そういうことが言いたいわけじゃないから！普通にあなたたち生活してたでしょって、タケルを忘れて。あそこにタケルがいたことも忘れて、普通に、何？アルバイト？何そのエプロン、無地がおしゃれだとでも言いたいんですか？
女2　え
女3　あのね、今日は私お金を返しにきたの、（男3に）ね
男3　え、あ、そうですね

女3　お金！お金を返しにきたのよこんなところまで！何、文句ある？
男1　文句っていうか
男2　誰のお金？
女3　え？
男1　お、いいぞ。そうだよな、誰のお金かっていうことが……
男3　さすがに僕のお金だよ
男1　まあ……そうか、返しにきたんですもんね
男3　中崎くんがお金貸してっていうから、貸してあげたの。でも返してもらえそうになかったから、まあ、仕方なく（連絡して）？
女3　いや、こちらがご迷惑をおかけした話なので、申し訳ありませんでした
男3　いやいや、返してもらえたんで。こっちとしては全然
男2　いくら！幾ら借りたの
男3　……それを聞いてどうするの？
男2　わかんないけど、わかんないけど！
男3　50万
男2　50……50万……あ、全然わかんない
男1　ごめん、俺もちょっと思ってたより桁が……
男3　もういいかい？
女3　あ、本当ありがとうございました
男3　あ、また色々終わったらご連絡させていただきます
女3　あ、はい。よろしくお願いします
男3　はーい。アキちゃんもまたね
女2　あ、はーい

男3、去ろうとして、

男3　（男2に）あんまり調子乗らないでね
男2　……。
男3　頼むよ～

男3去る。

男2　……今なんて言ってた？
男1　え？
男2　ごめん、50万で頭がいっぱいだった
男1　ごめん、俺も全然聞いてなかった
女3　……バカ二人

男1　え？
女3　バカ二人って言ったのよ……もう嫌になる……なんで私が……

と、女3座り込んでしまう。

女3　……暑い

そう、まだ夏の盛りなのだ。昼は暑い。
日がだんだんと進んでいて、影の形も変わっている。

女2　コーヒーお飲みになれますか？
女3　え？
女2　アイスコーヒー、落ち着くと思います
女3　いや、でも……
女2　サービスです！サービスですから！

と、女2扉の奥に消える。

男2　……50万っていくらですか？
女3　50万は50万だよ。円だよ円。50万円。
男1　いや、気持ちは分かるぞ
男2　全然、ピンと、こない
女3　あんたたちさ、50万失った人を目の前によくそんなことが言えるね
男1　ああ、たしかに……すいません
男2　ごめんなさい
女3　まあ、私も全然ピンときてないけど
男2　ですよね！
男1　ちょっと、黙れ
女3　なんで、私が50万払わないといけないのよ
男2　なんでですか？
男1　黙れ
男2　でも、ほんとに知りたくない？50万なんて……50万だよ？
男1　それは、まあ、そうだね
男2　俺、今50万もらっても何するか思いつかないよ
男1　まあ、そうだね
男2　あ
男1　なに

男２　あ、思いついたけど言わない
男１　なんだそれ
男２　タケルは何に使ったんだろ
男１　いや、その前にあいつが今どこにいるのかっていうことじゃないか？
男２　そうか
男１　そうだ、そうだよ。今俺たちなんにも知らないぞ。50万に頭がやられてたけど、タケル、だって、もう一ヶ月もいないし、それでお姉さんきて……お姉さん？
女３　何？
男１　いや、本当にお姉さんなのかなって
男２　なんだよそれ怖えよ
女３　怖いよ、何それ
男１　だって、歳そんなに変わんなそうだし
女３　別に普通でしょ。年子のことだってあるでしょ
男１　お前会ったことないの？
男２　え
男１　高校からの付き合いなんだろ
男２　あいつの家行ったことねえもん
男１　なんで行ったことねえんだよ
男２　遠かったんだもん
男１　遠、かったらまあ確かに行かないか
女３　あの……別に私は、私がタケルの姉であることを信じて欲しいとか思ってるわけじゃないし、むしろ姉じゃなければ、50万も払う必要なかったと思うし、っていうか、もし仮に私が姉じゃなかった場合、私が他人のために50万円失ったというこの事実はどう処理していただけるのかしらバカ二人
男１　あ、まあ、確かにそうか
男２　でもさ、でもさ、あいつが本当にお金貸してたか分からないじゃん
女３　何？
男２　あいつが勝手にタケルが金を借りたことにして、お姉さんに連絡してっていう
男１　確かにね！冴えてるぞ！
男２　なあ！
男１　ありえるありえる
男２　あいつ、そんなことしそうだし
女３　はあ～～～（信じられないほど深いため息）
男１　え、そんなに？

女3　そんなことさ、考えてるに決まってるじゃない？私払う側だし、連絡来た時どんな人か聞いて、調べたし。そうしたらタケルが働いてる会社の人だっていうから

男1　え、そうなの？

女3　え、知らないの？

男1　え、知ってた？

男2　全然

男1　だよな

女3　あんた達はさ、何を知っているわけ？

男1　あー……

男2　清掃の仕事してるって

男1　言ってたな、確かに。一、二年前くらいからだっけ？

男2　もっと前じゃない？三年、四年前？

女3　五年前。職場がなくなったから新しく職探しって、え、本当に何も知らないのね

男1　いや、まあ、それは……なんていうか、そういう関係じゃないっていうか、人と人っていうのはそういうわかりやすい関係じゃなくて、情報と情報を？交換して、わかってるとかそういうことじゃないっていうか

女3　関係ね……苗字も知らないのに関係がそうとかそうじゃないとかある？

男1　いや、俺が言いたいのはそういうことじゃなくて。苗字とかそういうことじゃなくて、そんなこと知らなくてもさ、人間と人間がなんともなしに集まって……集まってるっていう……そこで、そのなんだろう触れ合ってるっていう、なんかそういう関係っていうか

女3　意味不明

男1　え

女3　まったくもって理解不能

男1　言い過ぎじゃない？

女3　何があるわけ？そこに

男1　何って……どういうこと？

女3　その君のいう、そういう関係？っていう……つまり相手の苗字も働き先も、どんな人間かも知らないけど、なんとなく集まって喋って時間が過ぎていくのを待つっていうその関係？のなかに

男1　どんな人間かわからないわけじゃないでしょ、それは、会って話したりしているわけではあるし

女3　じゃあ、その情報？が何も積み重なっていかない関係と時間の先には一体何があるの？

男1　一体何って……

女3　いいよ、あなたたち。楽しそうだよ。私も年に一回、高校の時の友人の結婚式とか？同窓会とか？そういう時間ある。なににもならない過去を話すだけの時間。未来に向かっていかない時間。結婚式なんか最高だよね。友人の明るい未来を目撃して、お裾分けしてもらって、楽しかった過去についてだけを話せる時間。無害だよ、とっても

男1　別に俺たちは昔の思い出だけを話したりしているわけじゃない

女3　じゃあ、何があるのよ。その先には

男1　何がって、誰もがそんな風に何かを求めて誰かと会っているわけじゃないでしょ

女3　じゃあ、なんでタケルはここにいないの？

男1　え

女3　タケルがいないじゃない、君たちの親友？友達？のタケルは

男1　……。

女3　もう一ヶ月？君たちはタケルがいなくなったことも忘れて、普通に生活して。君たちの未来からタケルはいなくなったじゃない、君のいうそういう関係のその先から

男1　……。

女3　……コーヒー遅くない？

男2　あの！すげー怖いこと言ってもいいですか？

女3　何その宣言

男2　俺、今頭に浮かんじゃって、でも、ちょっと怖いからあんまり口にしたくないというか

女3　え、なによ、怖いよ

男2　え、じゃあやめときます

女3　なんでよ、一番怖いじゃんそれだと

男2　え、じゃあ言います？

女3　知らないよ

男2　（男1に）え、どう思う？

男1　……言えばいいんじゃないかな言いたいことは

男2　いや、言いたいわけじゃないんだよ、別に言いたいわけでは、ないんだけど

男1　言えよ！うるさいな！

男2　……え、じゃあ言いますよ

女3　うん、どうぞ

男2　もしかして

女3　うん

男2　その、タケルって

女3　うん

男2　し……んでます？
女3　はい？
男2　いや、もう、ちょっとなんていうんですか、どっかで死んじゃってて、それで、なんかそれすらも知らない感じに俺たちなってて、お姉さんきて、なんか引っ越したみたいな話かなって最初、そう思いながら聞いてたんですけど、なんかすごい、いなくなった感じがすごいしてきて。どっかに行ってまあ戻ってくるだろうとか思ってたから、なんとなくバイト始めて、まあなんとなく待ってたんですけど、そしたら、すごい帰ってこない感じに今なってるし、そしたら、すごいいなくなって、いなくなったっていう感じがすごいしてきたから……え、死んだんですか？タケル。いなくなったんですか？
女3　……いなくなったけど、死んではいないよ
男2　え？
女3　いなくなったけど、死んでないって。生きてるって、多分
男2　たぶんてなんですか？
女3　私だって知らないわよ！
男1　……。
男2　……。
女3　……タイにいるって
男2　タイ？
女3　もしくはタイワン
男2　タイワン？え、どっち
女3　知らない、なんにせよ海外
男2　……。
女3　教えてくれたのよ、「タケルはこの50万をいったいどう使ったんですか？」って（聞いたら）、「タイだかタイワンだかに知り合いがいて、お店出すから手伝ってくれって言われたみたいで、「すごい行きたいんですけど、お金ないんですよ。貸していただけないですかね？結構儲かるみたいなんで、それで、ちゃんと返しますから」って……僕は中崎くんのこと信用してるんですけど、万が一ってことがあるじゃないですか、だから免許証のコピーと緊急の連絡先をもらって……すみませんね、お姉さん」って……あの人すごい腰低くてさ、なんか申し訳ない気持ちになっちゃったよね。まあ、現に申し訳はないわけなんだけど……あなたたちが払いなさいよ、50万……なんで私の番号書くのよ……親友なんでしょ、友達なんでしょ……
男2　いいなあ
女3　え
男1　……え？

男2　あ、いや、俺もタイ?タイワン?行きたいなあ……カンコクでもいいよね、本場のサムギョプサル
男1　……。
男2　知り合いの店って誰なんだろ。同級生かな……だとしたら俺も誘ってくれてよかったよね……こんなとこもういる意味ないしな
女3　……。
男2　新しいお店か……あ、ここもそうだわ新しいお店……なんか夢があるよね、新しい場所でお店をやるって……生活もガラッと変わるんだろうな、お腹大丈夫かな?俺けっこう胃腸が弱いんですよね……カンコクか。あ、でも金ねえな……俺も借りようかな
男1・女3　……。
男2　え、いや冗談すよ冗談!あいつ嫌いだし
男1　あ、え、そういうことじゃなくて

と、男4が扉から出てくる。

男4　お待たせしました、アイスコーヒー……

不穏なあっつい空気に言葉が詰まる。日が落ち始めて路地には夕陽が差し込んでいる。真っ赤な夕陽。

男2　あ、遅いっすよ店長
男4　あ、ごめんねバタバタしちゃってて
男2　あ、そうか。買い出し!
男4　あ、うん
男2　まだ行ってないですよね?
男4　ああ（男1と女3をちらみ）
男2　じゃあ、僕行きますよ
男4　あ、でもあとでいいかな、今ちょうどお客さん来たから
男2　じゃあ、アキさん手伝ってきますよ
男4　あ、じゃあお願いしていい?
男2　はーい

と男2店の中へ。と思ったら一瞬振り向いて、

男2　あとで
男4　はい?

男2　あとで、鍵ください
男4　鍵？
男2　自転車の
男4　……ああ、自転車、鍵。
男2　買い出しで……いいですよね？
男4　ああ、いいですよ、もちろん

男2、今度こそ店の中へ。

男4　……アイスコーヒーは（男1の方みて、明らかに違いそう、女3の方に）……アイスコーヒーです。
女3　ああ
男4　すみません、お待たせして
女3　はい
男4　ああ、ですよね
女3　あ、ごめんなさい今ちょっと頭が働かなくて
男4　ああ？いや、まあ、暑いですからね、夏ですし
女3　ありがとうございます。アイスコーヒー

女3、コーヒーを受け取り、上の飲み口のところを外して、一気飲みをする。ゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴク。男たちのただ待つ時間。
飲み終わった。一息つく。

女3　……おいしかったです
男4　あ、ありがとうございます
女3　（男1に）ねえ
男1　……はい
女3　……あいつなんなの
男1　……ちょっと俺も、わかんないっす
女3　……そう
男1　……元々わかってなかったんですけど、よりわかってなかったってことがわかりました
女3　……いい時計ですね
男4　え、あ、え、ああ
女3　50万くらいですか？
男4　はい？
女3　ここって、元々ラーメン屋でしたよね

男４　え、あ、そうなんですか？
女３　あったよね？
男１　ありました、ありましたよラーメン屋
女３　よく家族で来てて、なんでだっけ……まだ小学生の時とか……お父さんが好きで……今考えるとラーメン好きの走りみたいな感じで、美味しいラーメン屋があるからって週末お父さんとタケルと三人で……お父さんがチャーシューメンの焼飯セットで
男１　ああ、焼飯
女３　そう、焼飯セット。それで、私とタケル二人で普通のラーメンと焼飯セットを分け合って、一人じゃ食べきれなかったし……グリーンピースが入ってて、タケルが食べれないからって焼飯の山から緑のグリーンピースだけを取り除いて……あんまり好き嫌い無い子だったのにグリーンピースとヒジキだけは食べれなくて……私は海鮮が苦手だったから二人でそれぞれ苦手なものをあげてて……美味しかったなここの焼飯。ラーメンも今時見ない普通のラーメンで……テレビがあってお父さんが野球見ながらビール飲んで……名前なんだっけ？
男１　え
女３　お店の名前
男１　あ、いや、覚えてないっす
女３　まあ、そうか……覚えてないよね、名前なんて
男１　……。
女３　……お店の名前なんていうんですか？
男４　え
女３　なんかお店なんですよね、新しい
男４　あ、ああ、そうですカフェバーで
女３　カフェバー？
男４　カフェバーです。カフェとバーっていう
女３　ああ、カフェとバー
男４　リバティっていう
女３　え？
男４　あ、お店の名前です。カフェバー、リバティ
女３　あー
男４　はい、今、聞かれたんで
女３　カフェバーってことはお酒があるってことですね
男４　え、ええ。カフェとバーなので
女３　少しいただいてもいいですか？
男４　え
女３　あ、お金払いますよ、もちろん

男４　あ、いや、ええ、ありがとうございます

女3、ふーっと息を吐き立ち上がる。

女３　（男１に）じゃあ
男１　ああ
女３　荷物の処分とかはもうお任せしておいたので……タケルが帰ってくることは無いと思います
男１　……。
女３　いや、一応言っておこうと思って、じゃあ

女3、扉の方に向かう。

女３　こっちから入ってもいいですか？
男４　ああ、はい

女3、はいの「は」くらいで扉を開けお店の中へ。
残される男二人。

男１　……。
男４　……。

何も話すことがない。無意識にタバコに手が伸びる男４。
男４がタバコを取り出そうとしたところで、

男１　一応禁煙ですよ
男４　……ああ

と、タバコをしまう。

男４　……意外と厳しいんですね
男１　まあ、他人の家の前なんで
男４　ああ、まあ、そうですか
男１　お店で吸えないんですか？
男４　あ、いや、禁煙にしてて
男１　ああ
男４　アキがタバコ嫌いなんで

男1　……お店順調ですか？
男4　あ……まあ
男1　ラーメン屋も美味しかったんですけどね……気づいたら無くなってて
男4　……じゃあ、そろそろ（戻りますね）

男4、扉の方へ向かう。

男1　結婚してないんですよね？
男4　はい？
男1　アキと
男4　……ええ、それが何か？
男1　いや、別に。知りたかっただけで……なんにも知らないみたいですから僕は
男4　……。

男4、扉を開け店の中へ入っていく。
残された男1。あたりは少しずつ、暗くなり始めている。
タケルの部屋を見上げてみる。その先にはネオンが点き始めた謎のオブジェが見えて、無駄に天気のいい空。
ふと、人影が見える。

男1　タケル！

と階段を走って上がって行こうとするも、止まる。
少しして、引き返し、そのまま路地の入り口に向かいいなくなる。

誰もいなくなった路地。夕陽が赤から紫色に変わる、夕方の一瞬の異様な時間。

しばらくして、扉が開く。
男2が出てくる。自転車の鍵をポンポン上に投げたりしながら遊んでいる。左手首にはなぜか男4の時計が。

自転車の鍵を開け、再びまたがる。グルグル車輪を回す。

男2　涼しい～

女1が路地の入り口からやってくる。

女1　あ
男2　あ（自転車を漕ぐのをやめる）
女1　（笑って）何してるの？
男2　自転車をゲットしました
女1　盗んだの？
男2　……盗みました
女1　……私も乗っていい
男2　もちろん

女1、自転車の後ろの荷台に腰掛ける。

女1　いい時計だね
男2　あ、これ
女1　盗んだの？
男2　……盗みました
女1　似合ってるよ
男2　ほんと？
女1　うそ
男2　……そっか
女1　そんな時計似合う人はロクな人間じゃないよ
男2　それもそうですね
女1　……出発する？
男2　はい！

男2、再び漕ぎ始める

男2　涼しい～
女1　（笑って）ね。涼しいね
男2　涼しい～～

女1、微笑ましく笑う。

暗転

第４場

少し時間が経ち、深夜。変わらず路地。
女２が第３場と同じ場所、扉横の丸椅子に座っている。
が、自転車がなくなっている。
赤いパトランプが路地の入り口を照らしている。
女２、何か歌を口ずさんでいる。歌詞うろ覚えなのに、なんでか口ずさんでいる。

しばらくして、男１がやってくる。

女２　あ、コウヘイ君だ
男１　ああ
女２　来てくれたんだ
男１　え、だって呼ばれてっていうか
女２　こんばんは
男１　いや……大丈夫なの？
女２　大丈夫では、ないんじゃないかな、たぶん
男１　え
女２　中、警察の人いるし。警察が来たら大丈夫ではないかな、たぶん
男１　いや、そうなんだけど。あいつが、テツが何？盗んだ？泥棒？
女２　そうそう、泥棒だったみたい、テツヤくん。気づいたら、いなくなってて。あれ？って思って、でも買い出し行くって話だったから待ってたんだけどなかなか帰ってこなくて。遅いなあとか思ってたら、タツキくんが時計がないって言い出して、ええ？無くしたんじゃない？とかって話して。いつも洗い物する時外してたのタツキ君。それで、探してもなかなか見つからないし……そしたらお客さん帰るってなって、またそれがめずらしく現金支払いで、「一万円いただきました～」って言って、「おつりは」ってレジ開けたらお金全部無くなってて、びっくり……びっくりしたねほんとに
男１　……。
女２　なんか店の中居づらくてさ……警察ってなんなんだろうね。被害者なのに、やっぱりビクビクしちゃうよね。不思議だよね
男１　……なんか、ごめ（ん）
女２　あやまらないで！
男１　え
女２　悪いと思ってないのにあやまらないで
男１　いや

女2　だって、実際悪くないでしょコウヘイくんは
男1　ああ、まあそうなんだけど……
女2　どこ行っちゃったんだろう
男1　ここくる途中であいつの家寄ってきたけど、なんか、もぬけの殻になってて
女2　あ、そう
男1　うん、多分あいつ、結構前からどっか行くつもりだったんじゃないかなって、だから、もしそうだったらそれに気づけなかった俺が……
女2　悪かったって？
男1　いや、まあ
女2　いつ気づいたの？
男1　え
女2　テツヤ君が前からどこかに行こうとしてるって
男1　それは……今日だよ
女2　なんか嫌な予感してたんだよね
男1　え
女2　地元に帰るってなったあたりから、なんだか上手くいきすぎてるかもしれないって
男1　え、なんの話？
女2　思い通りになってるって思ってたの。思い通りに
男1　思い通り？
女2　うん
男1　……いいじゃん思い通りで
女2　思い通りいってるから油断してて、なんで思い通り進んでいるのかを考えてなかった。なんにも考えてなかった私。好きかなって思う人ができて、その人の夢を応援しようと思って、家族もそれを応援してくれて、全部幸せなことだけど、全部初めから思ってたわけじゃなかった。思ってたわけじゃなかったんだ。全部通り過ぎてから思い通りだったことにしたんだ私……テツヤ君はどうなんだろう、思い通りなのかな
男1　……さあ、何にも考えてないんじゃない？
女2　思い通りだといいな
男1　……何言ってるのかわからない
女2　コウヘイ君は？
男1　何が？
女2　思い通り？
男1　俺は……

女2、立ち上がり男1のそばへ、

男1　なに？

そして、男1の頭を撫でてあげる。

女2　よしよし

為す術ない男1。

女2　交代
男1　え
女2　交代

と、頭を差し出す女2。

男1　あ、うん

男1、女2の頭を撫でる。

男1　……よしよし

少しして、

女2　はい
男1　あ……うん

と二人離れる。

女2　どう？
男1　……。

と、扉の灯がつく。

女2　あ

男4が扉から出てくる。
口にはタバコを咥えている。

男４　ああ
男１　ああ……どうも
男４　（無意識な舌打ち）
男１　え

男４、女２をチラ見してから、扉から離れた場所に行きポケットからライターを取り出す。
口に咥えたタバコに火をつけようとするカチッカチッ。しかし、ライターの火はつかない。カチッカチッカチッカチッ……
突然、ライターをぶん投げる男４。

男４　ああ！！もう！！！吸わせろよ！！タバコ！！！

タバコもぶん投げる。

男４　だから嫌だったんだよ、こんなところに来るの！どいつもこいつもバカにしやがって！！金か！結局金なんだろ！ああもう！！

男１が目に入る。

男４　お前なんなんだよ
男１　俺？
男４　お前だろ！人のパートナー捕まえて、思い出話かなんかしらないけどダラダラ喋りやがって、気持ち悪いんだよ、俺の気持ち考えろよ、気持ち悪いんだよ！
男１　……言い過ぎだろ
男４　何が？
男１　気持ち悪いって、気持ち悪いって２回も言ったな！
男４　だからなんだよ！
男１　だから何かなんて知らねえよ！パートナーとか言ってんじゃねえよ！
男４　今関係ないだろ！
男１　お前が絡んできたんだろ
男４　元はといえば、お前の、あいつが、盗んで、金も、時計も、挙げ句の果てには、自転車も、なんなんだよ、ほんとに、どうして、何が、どうなって……
男１　……何も言えません
男４　ああ？
女２　私が、謝らないでって言ったから

男４　なんだそれ！！……ああ、もうどうにでもなれ……どうにでも

男４、もいつぞやの誰かのように座り込む。

男４　……バカにしてたんでしょ、どうせ
男１　え？
男４　カフェバーだって、変な、中途半端な店を始めるやつが他所から来たって
男１　……。
男４　黙るなよ……元はといえば……違うか……元はといえば、元は、元々は、こっちに、やっぱりこっちに来たのが……ねえ
女２　え
男４　どう思ってた？
女２　何が？
男４　お店やりたいって俺が言った時
女２　嬉しかったよ、私は
男４　俺も、そこまでは、嬉しかったはずなんだけどな……そのあと、そうか……やっぱり
女２　嫌だった？
男４　え
女２　こっちに来たの
男４　……正直……正直最初は凄い嫌だったけど……でも、どうだろう。俺結構好きになってたかも、この街
女２　え、そうなの？
男４　うん、いや、よくわかんないけど……なんかこうなってみて。今、例えば、仮に、じゃあ他の場所で再スタートしよう、こんなこともあったし、みたいなことも考えれる……考えられるかもしれないけど……でも、なんかそれは違うような気もするんだよね……せっかく、だってせっかくこの街に来たんだよ……人生かけて！頭下げて来たんだよ！そんな、コソ泥に入られたくらいで……この街でさ、何十年と、カフェバーだよ。続けてたらさ、こんなことだってきっと笑い話にできるかもしれないしさ、多分……そういう器量を持っているよこの街は。確かに最初はよそ者だったけど、でも、きっと関係ないよ。どんどん他所から新しい店が新しい人がやってくるんだよ……そのなかでじーっと、ただじーっと待つんだ。未来を。見据えた未来を。ただ我慢強く……このテナント、すぐ店が潰れるんだって？
男１　ああ……まあ
男４　そうか、そうだよね、でもいいんだ、ただ待つんだ、どうにでもなれ……結婚しようか
男１　え

女2　え？
男4　え？
男1　……え？
男4　ああ……最低だ
男1　あ、だよね
男4　俺最低だったね
男1　うん、多分
男4　うわ、やばいかも、そっち見れないかも
男1　うわ、やばいやばい、俺どうしよう
男4　え、なんでなんで
男1　わかんない、わかんないけど、なんかわかるよ
男4　うわ、どうする、どうしよう
男1　わかんない、わかんないけど、わかるよ
女2　……どうする？
男4　え
女2　……どうしたい？
男4　……。
女2　ちゃんと考えよう
男4　……はい
女2　私も考える、私もどうしたいか
男4　はい
男1　……え、なんの時間？
女2　考える、考える時間……まずは今週をどうするか
男4　だね、それはそうだね……戻ります

男4立ち上がり、男1のそばに行き、手を差し出す。

男1　え？

男4、男1の手を勝手に取り、硬い握手。

男4　ありがとう、ごめんね、ありがとう
男1　あ、うん
男4　じゃあ、またいつでも遊びに来てください、リバティです
男1　え
男4　店の名前、忘れないでくださいね

男4、店の中へ。

男1　ポジティブすぎないか？
女2　そう？
男1　切り替え早すぎないか？まじで、なんだったんだ今の時間
女2　じゃあ私も

と、あと腐れ全くなく、扉に向かう女2。

男1　……ああ

扉に入りそうなタイミングで、

女2　……私思い出したよ
男1　え
女2　家庭科室のこと。私、そういえば家庭科室でお菓子とかお料理とかけっこうしてて……そうそう、なんでそんなことをしていたかっていうと、お弁当を作ってあげてたんだよ。たまに月に二回とか？なんかのきっかけ……体育祭かな、私が作ったお弁当あげたら喜んでくれて、それでお料理上手になりたいと思って、お料理部みたいなのに入って、渡り廊下通り過ぎた階段？のところでお弁当あげてて。その子のお友達だったでしょコウヘイ君
男1　え？
女2　たしか、野球部で、それで……
男1　待って
女2　え
男1　それ俺じゃない、俺じゃないよ！
女2　え、だって野球部だって、それで思い出したのに
男1　野球部じゃないって！サッカー！サッカー部！
女2　え？サッカー部？
男1　え、いっしょに遊びに行ったじゃん映画館とか
女2　それは、なんとなく覚えてるけど、最初の、キッカケの話をしてるの私は。その子の友達でなんとなく喋るようになってって感じじゃなかった？
男1　え、全然違うよ
女2　あ、そうなの？
男1　だって、そいつ野球部なんでしょ
女2　あ、そうか

男1　俺、サッカー。グラウンド、家庭科室の真横でさ、花壇があって、ヤカンで水をかけてくれたでしょ
女2　ヤカン？
男1　水をかけてくれたじゃないか！ヤカンで！
女2　ごめんなさい、全然覚えてない
男1　……。
女2　ヤカン……ああ、お水……
男1　思い出した？
女2　水を……花壇にあげてたような……ジョウロが確かなくて……
男1　……。
女2　ごめんなさい、やっぱり覚えてないや
男1　……。
女2　まあ、いいよね、大事なのはこれからなんだから。思い通りにしていかないと
男1　……。
女2　またね。コウヘイ君

女2、扉に去っていく。
男1、ただ一人取り残される。

男1　忘れてる……忘れられてる、俺、俺のこと。俺はサッカー部だったんですよ。野球と真逆の……甲子園にはいけないサッカー部ですよ……レギュラーじゃなかったけど、走ってましたよグラウンドを……

男1、上を向く。元々、タケルの部屋があった場所の方向を。

男1　……タケル……テツヤが泥棒になっちゃったよ……犯罪者だよ、本物の犯罪者……雨……雨でも降らないかな……雨、雨

男3が階段から降りてくる。

男3　お、何してんの？
男1　雨が降るのを待ってます
男3　何それ？
男1　びしょ濡れになったら思い出してくれるかなって
男3　……全然意味わかんない

男3、ベンチに腰掛けて、

男3　居なくなってたよ、彼女
男1　ああ
男3　まあ、そんな感じしてたよね
男1　はい
男3　ねー……一緒に待つかい？
男1　何をですか？
男3　わかんないけど
男1　帰って来ませんよ、誰も
男3　だろうね

男1、上を向いている。

男3　君はこれからどうするの？
男1　今、そんなこと聞かないでください
男3　でもさ、やっぱり……
男1　話しかけるな！！
男3　……雨……雨か……雨でも降ったらいいね
男1　……。
男3　そしたら、ここにいなくていいのに

男1、上を向いている。
その視線の先にはもう誰も居なくなった部屋。マンションの上に立っているオブジェ。それを煌めかすネオンの明かり。その先は空。真っ暗な空。
でも、街が明るいから雲ひとつないのだけはわかる。ただ真っ暗な空。
静かになった路地には、男が二人いる。その路地から2ブロック離れた場所では今日も、新しくこの街を訪れた人々が行き交っている。

（幕）